仮面ライダーディケイドとある世界

sinne-キョノリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーディケイドとある世界

【Ｎコード】

Ｎ５２１３Ｙ

【作者名】

ｓｉｎｎｅ－キョノリ

【あらすじ】

仮面ライダーディケイドと様々な者達はワールド・ブリッジと呼ばれる世界に迷い込む。其処で起こる様々な事件に士達は立ち向かう。＊オリジナルキャラが居ます。

プロローグ「少女と記憶喪失の少年」（前書き）

何やってるんだ私・・・。ちなみにプロローグなのでディケイドとか居ません。

プロローグ「少女と記憶喪失の少年」

部屋に、少女が居た。

「・・・・・世界を旅する者達が、この世界を訪れる・・・・」

少女は、言葉をつむいでいく。

「世界の破壊者だった者が・・・・。数々の世界を救う為・・・・・」

少女は、一人。虚空に言う。

「助けてあげて・・・・。数々の世界を、この世界を・・・・」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ある部屋にあるベッドの上で、少年は目覚める。

「此処は・・・・？僕は・・・・？」

「あ、目、覚めた？」

少女が少年に問う。少女は少年のことを知っている様だ。しかし。

「君は・・・・誰・・・・？」

少年からは問いの言葉が返ってくる。

「ルル・・・・。私の事・・・・忘れたの・・・・？」

「僕の名前は・・・ルルっていうの・・・？」

少年・・・ルルは、自分の事について何も覚えてないそうだ。

「・・・忘れちゃったみたいだね・・・」

少女は、一息入れてから、言う。

「あのね・・・私は鈴海ララ。貴方はルル・・・私は、ルルの双子の姉。私とルルは姉弟なの」

「姉弟・・・・・」

少女・・・ララはルルに向けて、自分の事、ルルの事を言った。

「うん、両親は居なくて、此処に二人なの。そしてね、私達は、ワールド・ガーディアンっていう仕事をしているの」

「ワールド・ガーディアン？」

「うん。この世界を数々の敵から守る為。導入された。裏の制度なの」

ルルは、自分達が普通の一般人でない事を確認すると、ルルはララに向けていった。

「で、僕は、何をすれば良いの？」

「ルルは・・・・」

そう言った所で、ララは、言葉を詰まらせる。

「無理に・・・言わなくて良い・・・」

「ごめん・・・」

ララはルルに謝罪する。

「あ、そうだ。今から、ある人達がこの世界を訪れるの」

「この世界を?」

「この世界は、様々な世界を繋ぐ、交差点の様な世界。私は、こう呼んでるの」

ララは、言った。

「ワールド・ブリッジ。てね」

続く

一話「旅人と黒の少年」（前書き）

ララ「こにゃ～、で、まあ、本格的にシリアス多めの連載が来ました～」
ルル「前回はプロローグだったからね」
士「今回は俺達が出るぞ」
ユウスケ「いやいやいや・・・微妙にネタバレだろ・・・」
夏海「てわけで、始まります」

ララ「あと、今回オリジナルの仮面ライダーが出るよ～」
ルル「出すつもりは無かったらしいけど、何故か出す事にしたらしい」

一話「旅人と黒の少年」

「此処は・・・何処だ？」

カメラを持った青年。門矢士が写真館から出てきた。

「う～ん、見る限り、普通の世界みたいだけど・・・」

「見ただけじゃ・・・何も分かりませんね」

続いて、小野寺ユウスケ、光夏海も出てきた。

「とりあえず、此処は俺達が見てきた世界とは、結構違う世界みたいだな」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「ワールド・ブリッジ？」

「うん、世界の架け橋だから、ブリッジ。ま、私が勝手に呼んでるだけなんだけどね」

ララはルルに説明している。

「あ、お客様が来たみたいだね」

「お客様？」

「うん、この世界と、数々の世界を救ってくれる、救世主かな？」

「ふ～ん」

「じゃ、ルル。探しに行くよ」

「え？」

ララはルルの手を取って、外へ行った。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「何も、手がかりは無いな」

「それに・・・士君の服装も、変わってませんし」

「あ、言われてみれば・・・」

夏海とユウスケは士の服装に注目する。

「で、どうするんだ？」

「とりあえず・・・歩いてみましょう」

「はあ？」

夏海の唐突な一言に士は戸惑う。

「だって、何もしないだけじゃ、何も分かりません。もしかしたら、この世界で何か知っている人に会うかもしれませんし」

「まあ・・・何もする事無いから、それには、賛成かな」

夏海の言葉にユウスケは賛成する。
この行動が、本当にこの世界で士達のする事を見つける事になるのだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

一方、ルルは、覚えてない景色に戸惑っていた。

「何処に行けばいいの・・・？」

「う～ん、写真館っていうキーワードしか無いからね・・・もうこの世界に来てるなら、何処か歩いてるかもしれないけど」

ララ達は、救世主・・・士達を探している。

「彼は、マゼンタのカメラを持ってるって、聞いたけど・・・」

「誰に？」

「鳴滝って人から、彼は、その人を破壊者って言って煩かったけどね。でも、今はそんなことを言ってる暇なんてないし、とにかく、今は戦力が足りないの」

ララは説明しながら歩く、その時だった。

「ｆｎｏ；ｇｏｉｓｈｔｇ，ｏｓｉｔｊｈ；ｓｏｉｔｈｊ；ｓｏｔｉｊｇｒ」

機械の様な物がいきなり出てきた。

「な、何だこれ！」

ルルは吃驚していたが、ララは慣れたように説明する。

「これは、この世界を脅かしている物。名称は分からないけどね。ワールド・ガーディアンはこれと戦っているの、でも・・・」

ララは、少し言葉を溜めて言う。

「最近は。別の世界の怪人達も来てるの。この世界の理屈に気付いてね」

ルルは、何も出来ないのかと思い、癖になってるのか、ポケットに手を入れた。

そして、鍵の様な物を取り出した。

「・・・・・！ルル・・・・」

「これは・・・・」

ルルは、自分でも何か分からないみたいだった。

「ルル。よく聞いて、それの使い方を・・・・う！」

ララは、機械の様な物に飛ばされた。

「ララ！！！」

「こっちは・・・大丈夫・・・・。ルル・・・・それは・・・・」

ララの言葉を無視して、ルルは、その鍵を、同じくポケットに入っていた錠前に腰の前で差し込んだ。
そして、ルルの腰にベルトが巻かれる。

「！」

「僕は今、怒っている・・・・・。お前のせいでな！」

ルルはそう言って、ベルトのケースに入っていたカードをスキャンする。

「変身！！！」

その時、丁度士達がララ達のところへ来る。

「これは・・・・」

「あ、貴方達は・・・・」

これが、出会いという始まりだった。

続く

一話「旅人と黒の少年」（後書き）

ララ「変身したね・・・ルル・・・」
ルル「うん・・・こうなる予定は無かったけど・・・」
ユウスケ「ちなみに、もう一つの仮面ライダー小説と同じ順番でＤＣＤ組は出るんだってさ」
ララ「へえ～、なら、次はカズマ君が来るんだね」
ルル（薄々思っていたけど・・・ララと僕の年齢は１３歳・・・。年上相手に君付けって・・・）
士（ルル・・・それは、もう一つの小説で突っ込まれてたぞ・・・）

夏海「次回予告します！」

次回予告。
ルルは仮面ライダーに変身した。
そして、士達は、ララ達は、対面した。
そして、この世界の理屈、この世界で起こってること。
それが、明かされる。

ララ「予告・・・なのかな？」

二話「出会いとこの世界の仮面ライダー」（前書き）

ララ「今回は、まあ、士君達との色々だね」
ルル「うん」
ララ「ちなみに、投稿者はカズマのファンらしいよ」
ルル「へえ～」
ララ「まあ、そう言っても、投稿者はリイマジなら全員好きだけどね」
ルル「なら、士の出番より、リイマジの出番の方が多いの？」
ララ「まあ、そうなるね」

ユウスケ「上の会話なんだ！！」
士「てか、俺やナツミカンよりも、ユウスケ達の方が出番多くなるのか・・・！」
夏海「あれ？あらすじするんじゃないんですか？」

二話「出会いとこの世界の仮面ライダー」

「これは・・・」

士達の目の前に居たのは、見た事の無い仮面ライダー。
基本とした色は黒なのか、殆ど黒色だ。

「成る程な、この世界の仮面ライダーか」

士は、少し驚いたように言う。
そして、近くに倒れていたララをユウスケが見つける。

「大丈夫か？」

「はい・・・貴方達が・・・世界を旅する仮面ライダー達？」

「ああ。そうだ」

ララの質問にユウスケが答える。

「すみません・・・詳しい話は・・・また後で・・・うっ！」

ララが傷を負っている。
それに気付いたユウスケは、夏海に言った。

「夏海ちゃん、この子。怪我してる。手当てをしてあげて」

「分かりました」

ユウスケと夏海がララを手当てしようとしている近くで、ルルは戦っている。

「・・・・・」

ルルは、無意識に体を動かしている。
そして、軽い身のこなしで相手の攻撃を避け、相手に攻撃を与える。
敵は倒れ、ルルは変身を解いた。

「・・・・・これって・・・。ララ！！」

ルルはすぐにララの元へ来た。

「ルル・・・。私は大丈夫」

「とりあえず、喫茶店に行かなきゃ」

「喫茶店？」

ルルの言葉に、ユウスケは訊いた。

「うん、僕とララの住んでる場所・・・らしい・・・」

「？」

ルルは言葉の最後に、自信が無いそぶりを見せた。
士は、自分達の住んでいる場所のはずなのに、自分の言っている事に自信を持ってない事に疑問を持つ。

「じゃあ、僕がララを背負っていくから、僕についてきて・・・」

そして、ルルは士達を喫茶店の場所に案内する。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「で、さっきのは何だ？ルル・・・って言ったか」

「僕にも・・・よく分からない・・・」

士の問いに、ルルは首を振る。

本当に何も分かってないようだ。

「ララが奴らに傷つけられて・・・何だか許せなくて、そしたら、いつのまにか・・・」

「本能で行動したって事か・・・」

士は言った。

「まあ、ルルは覚えて無くても仕方ないよ・・・ルルは、記憶喪失なんだから」

「記憶喪失？」

「うん・・・瀕死の怪我を負って、ルルは記憶を失くしたみたいなの」

ララは言った。

そして、ララは続けて説明した。

「さっきルルが変身したのは、この世界の仮面ライダー。仮面ライダーフォルティ。黒色で、フォルティッシモをモチーフにした仮面ライダーなの」

「フォルテッシモって・・・なんだっけな」

士が言って、ララは付け足す。

「フォルッテシモは音楽記号。強く弾くって事」

「ああ、そうか・・・」

「音楽では・・・結構基本的な記号だよ・・・」

ルルは言った。其処は覚えているらしい。

「で、この世界の仮面ライダーは、裏で活躍しているの。この世界の裏制度であるワールド・ガーディアンの所有物・・・かな？」

ララは、そう言いながら、ルルの持っていた錠前と鍵を出す。

「で、これは仮面ライダーフォルティに変身する為に必要なキー。フォルテキーベルト。この世界には何百も居たの」

「居た？」

ララの言葉に、ユウスケは訊いた。

「うん。あの機械の様な怪物が出るまではね。あの怪物のせいで、殆どの仮面ライダーのキーベルトは破壊され、修理も出来ないほど

に粉砕されてしまったの。ルルの持っている物と、あと二つ以外はね」

「成る程。この世界には仮面ライダーは三人って事か」

「そうなの。だから、この世界の数少ない仮面ライダーである一人のルルも、狙われてるの。そのせいで、ルルは記憶を失くしたの」

そう言ったララの表情は、とても悲しそうだった。
ララは、自分の首にかけているペンダントを取り出した。

「これは？」

「これはね、私の恩人の残した物なの。ラルっていう、とても素敵な人だったの。ラルもね、仮面ライダーのキーベルトを持ってたの。でもね、怪物との戦いの末に行方不明になって、その時に残っているキーベルトの一つが何処にあるか分からなくなってしまったの」

ララは、悲しそうな表情のまま、話を続ける。

「でもね、これは表向きの情報。本当の事は、私しか知らないの。実は、ラルは行方不明になったんじゃなくて、人間じゃなくなったって言うか・・・この世界には、もう居ないって言うか・・・。この世界の何処を探しても、ラルはもう見つからないの」

「悲しい事を訊いたようで・・・ごめん」

「ううん、良いの。これも、今までに起こった全てを話すにはとても大事な事なの」

ララは無理に笑って見せて言った。

その時

「ｄｆｈｄ；ｏｇｕｈ；ｄｏｆｕｈｇ；ｄｏｈｕｉｔ；ｒｏｕｈｔ；ｏｒ；８ｗ４７ｔ８ｅｈｒｕｈｔｇｌｅｉｒｈｕｌｉｓｕｒｇｈｔｌｉｓｒｕｇｔ！！！」

「これは！」

「あの機械か！」

士が言った。

「まさか、また襲ってくるとは・・・」

その時、それは、ルルを狙って、バスターを撃った。

「ルル！危ない！」

ユウスケが叫ぶが、間に合わない。

ルルが、もう駄目かと思った時。ある男が、ルル達を助けた。

「大丈夫か！士！それとユウスケ！」

其処には、剣立カズマが居た。

そして、彼はブレイバックルにカードを差込、ベルトを巻いて言った。

「変身！」

続く

二話「出会いとこの世界の仮面ライダー」（後書き）

ララ「いや～、二話目にしてシリアスどんどん来るね～」
ルル「いや・・・プロローグの時点から、結構シリアスだったけど・・・」
ユウスケ「それにしても・・・カズマの登場の仕方が無駄にかっこいいぞおい！」
カズマ「そうか？」
士「そうだ、しかも、俺はまだ変身してないのに、何でお前は変身してるんだ！」
カズマ「知らないし！なら士が変身すればいいだろ！」
士「出来なかったから言ってるんだろ！」
ルル「カズマ、負け犬の遠吠えはほっといて、次回予告」
カズマ「いや・・・ルル。流石にそれは無いと思うが・・・。まあいい。次回予告をしようか」
士「なんだと!?」

次回予告
ルル「えっと・・・なんか、カズマって奴がいきなり出てきて、変身します」
カズマ「それあらすじ！これ次回予告！」
ルル「・・・・。僕達を突然襲った怪物。その時、リイマジのブレイド。剣立カズマがブレイバックルを巻き、ヘンシした」
カズマ「何でヘンシなんだよ！其処は普通変身だろ！」
士「・・・・あいつら、お笑いコンビか？」
ユウスケ「さ、さあ・・・」

三話「登場と世界の守護者」（前書き）

士「前回のあらすじ、カズマが俺の出番奪いやがった」
ユウスケ「それだけじゃないだろ！」

ララ「今回はオリジナルキャラも増えるよ～」
ルル「あと・・・更にワールド・ガーディアンについての事も出るらしい」
カズマ「士より先に変身できた！」
ユウスケ「喜ぶところそこか！？」

三話「登場と世界の守護者」

「カズマ・・・・??」

「あれが、ブレイド・・・」

ルルとララはそんな言葉をこぼす。
士達の目の前に居るのはブレイド。剣立カズマ。

「士!俺がこれどうにかしてるから、お前達は其処の二人連れて行け!」

「あ、ああ」

士は言われるがままにララとルルを連れて行こうとするが・・・。

「ルル、いくぞ!」

「待て!ララが居ない!」

「なんだと!?」

ルルの言葉に士は動揺する。
確かに、辺りを見渡してもララの姿は無い。

「何処に行ったんだ?」

その時、

「ぐあああああ！！！」

「カズマ！！」

カズマは数の多い相手に飛ばされた。
変身はとけてないが怪我は相当なはずだ。

そして、一つの影が士達の近くを横切った。

「何だ！？」

其処に居たのは、白が印象的な仮面ライダー。

「あれは・・・何だ・・・？」

「仮面ライダー？」

士とユウスケが続けて言う。

「・・・・・」

それは何も言わず、機械の様なものを物凄い速さで倒すと、何処かへ消えてしまった。

「一体・・・なんだったんだ・・・？」

「カズマ！大丈夫か？」

ユウスケがカズマの元へ行った。
カズマは変身をとくと、士に言った。

「此処は、一体何処なんだ？家から出たかと思うと此処に突然来たんだが」

「此処は、少なくともお前や俺の居た世界じゃない。あそこに居る、ルルという少年の世界だ」

ユウスケが言うと、ルルはこう言った。

「この世界は、ワールド・ブリッジと、ララは呼んでいる・・・らしい。この世界が危機に陥ってるとか、ララは言っていた。あと、ララと僕は、ワールド・ガーディアンと呼ばれる組織に入っている・・・らしい・・・」

ルルの言葉には、自信が無いと言うか、自分でもよく分かってないような言い方。

それもそうだ。彼は記憶喪失なのだから。

「ふ～ん、世界の名前は、要約すると、世界の橋って事だよな？何でだ？」

「分からない・・・。ただ、ララはこの世界を他の世界との架け橋と言っていた」

「成る程、架け橋・・・。橋・・・。ブリッジか・・・」

カズマは分かったように言う。

「あ、ルル！皆！」

「ララ！、何処に行ってたんだ？」

ルルは訊いた、ララは

「え？えっと・・・・。隠れてたの、他の場所に」

士は、ララに訊いた。

「ちょっと訊きたい事がある」

「何？」

「さっきの、白い仮面ライダー。あれは何だ？」

士の言葉に、ララはこう返した。

「それは、無くなってたと思われたもの。ラルの使っていたキーベルトの仮面ライダー。名前はピアニィ」

「僕のがフォルティッシモ・・・。あれが、ピアニッシモって事？」

「うん。そうだよ。ルル。でも・・・あれは本当に何処かに行ってしまったと思われたけど・・・」

ララは考えるように言った。

「とりあえず、休もうぜ・・・。俺、疲れたんだけど・・・」

ユウスケが言った。

「じゃあ、喫茶店に戻りましょうか」

そして、士達はそのまま一晩あかした。

次の日。

「おはよう、あれ？ララちゃんは？」

ユウスケが起きて、ルルに訊く。

「ララは、ワールド・ガーディアン本部に行っている。朝ごはんはあそこに作り置きしてある」

ルルは言った。

そして、夏海も起きてくる。

「そうですか・・・ララちゃんはその本部に行ってるんですか」

「うん。・・・・あの士って奴は？」

「士はまだ寝てる。昨日ので疲れたみたいだしさ、もう少し寝させてやれ」

カズマが出てきて言った。

（お前が言うなよ・・・）

ちなみに、ユウスケはこう思ったとか。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

一方、ララは・・・。

「おはようございます。小原さん」

ララの目の前に居るのは小原(おはら)。下の名前はララにも分かっていない。

「お、ララちゃんか、どうしたんだ？」

「いえ、ピアニィの事についてです。あと・・・仮面ライダーの」

「ララちゃんにしては、真面目な話だな。いつもは、弟君の暴走とかで大慌てしていたのにな。それに、最近顔出ししていなかったが、どうしたんだ？」

小原はララに訊く。

「いえ・・・ルルは、今、記憶喪失なので。では、本題に入ります」

小原にとっては、ルルの記憶喪失も気になるのか、だが、ララの話のほうが重大なので、ララの話を訊く事にした。

「昨日、ピアニィを目撃しました」

「なんだと？」

「はい、あのキーベルトはもうすでに何処かへ消えてしまったと思われていたのですが、ピアニィのキーベルトはありました。しかも、新しい変身者を迎えています。この件については、私達のほうで機密にしていただきますか？」

「ああ、お前は、一応俺の上司だしな。上司の命令は絶対だ」

「そして、仮面ライダーについての話です」

「うまくいったのか？」

小原はララに訊いた。ララは、コクリと頷いて、言った。

「はい。ディケイドの門矢士。リイマジクウガの小野寺ユウスケ。リイマジブレイドの剣立カズマ。この三人を呼び出す事に成功しました」

「この世界にあるほかの世界の仮面ライダーの情報は、この三人しかないからな。ディケイドに、他の世界の仮面ライダーについて訊けると、信じているよ」

「はい。まだ少ししか話していないですが、悪い人ではありません。ですが、一つ気がかりな事があります」

「どうしたんだ？」

ララの言葉に小原は少し顔をゆがめる。

「私は、彼らだけを呼び出したつもりですが、何故か、彼らに光夏海という女性がついてきているんです。彼女もまた、仮面ライダーなのでしょうか？」

「分からんな。だが、そういう可能性がある」

「分かりました。では、私は、今から彼のところへ行きます」
「あいつか・・・。ララちゃんくれぐれも、自分の年齢考えろよな」
「私は、貴方が思っているほど子供な年齢じゃありません」
「ははは・・・それは悪かった。じゃあな」
「はい」

そして、ララは部屋を出た。
ララは、正直言って自分が子供扱いされるのがあまり好きではない。
かと言って、あまり年上に見られるのも好きではない。
ララは、”同年代”が一番話しやすいのだ。
ちなみに、小原の年齢は２３歳。ララよりは１０歳くらい年上のはずだが、ララはあまり子供に見られるのが嫌なので、年齢については少々煩い。

ララは、ある場所で待っていた。
「あ、ララ！久しぶりだな～。少し見ない間に、少し大きくなったんじゃないのか？」
「そうかな？失人君」
彼は歌野失人（うたのしつと）。
ララの部下だが、やはり年齢はララより年上なはずの２０歳。
「あと、ララ。年上を君付けするのはよくないって言っただろ」

「だから、年下扱いしないでって。私は同等が好きなの。まったく。失人君は・・・。で、本題だけど、私と一緒に来て」

「はあ？」

そういわれながらも、失人はララの言うとおりにララの喫茶店に来た。

「ララの店か、此処に来るのも久しぶりだな」

「おかえり。ララ」

ルルがララを出迎えた。

「そっちの人は？」

ルルは訊いた。それは、彼が言うはずの無いことばだった。ルルは、彼を知っているはずだからだ。

「ルル？俺を、覚えてないのか？」

「あ、ああ・・・失人君。ルルは、記憶喪失なの・・・」

ララの言葉に、失人は驚く。

「え？。あ、ああ！！だからか！なんだか、ルルが居ないなとか、ララが最近本部に顔出さなかったのも、そういう事か！」

そして、お店の奥の方からカズマが出てきた。

「煩いな～。あれ？ララちゃん・・・だっけ？その男の人は？」

「あ、この人は私の・・・・一応、部下？の歌野失人君」

「始めまして。ララ。この人が、例の別の世界の仮面ライダーか？」

「うん」

カズマは、その言葉に、疑問を持った。

「俺が、仮面ライダーだって、分かるのか？」

その言葉に、失人は

「ああ、これが、ララから言われた、この世界を救う方法に居た。救世主だからな」

「うん、今から、全員を呼んできて、昨日はいえなかったけど、とても大切な事を今から言うから」

ララも、真剣な顔になって言った。

続く

三話「登場と世界の守護者」（後書き）

ララ「もう！私を年下に見ないでよ！」
ルル「そういえば、オリジナルライダー二人目だな」
ユウスケ「何か、秘密があるのか・・・」
カズマ「この世界の秘密とか、そういうの気になるよな！」
士「っていうか、これの主人公誰だ？」
ルル・士以外全員「ルル（君）だろ（でしょ）」
ララ「あと、ヒロインは私らしいよ」
カズマ「投稿者の話によると、士よりリイマジの俺らのほうが出番多いらしいし」
士「くそおっ！」

剣崎「それでも・・・出番がまったく無いと思われるオリジの方が・・・な・・・」
城戸「・・・うん・・・」
フィリップ「でも、W以降は出番あるらしいよ、翔太郎」
翔太郎「そうか・・・。ならいいか」
クウガ～キバのオリジ「お前等は出番ありそうでいいよな！！！！！」

ララ「あれ？次回予告が行方不明・・・」

四話「仮面ライダーと召集の秘密」（前書き）

ララ「今更だけど私達小説キャラの設定とかね」
ユウスケ「本当に今更だよな！」

鈴海（すずみ）ルル　１３歳（？）　男
主人公。
暗めの性格。大切な人は命をかけてまで守る主義。
俗に言うヤンデレ。でもツンデレ成分も少しある。
物語が始まった時は記憶喪失なためララの事しかあまり信じられない。
色々な人との出会いによって性格が暗いのは改善されていく。
記憶を失くす以前はララと同じような性格の少年だったらしい。

鈴海（すずみ）ララ　１３歳（？）　女
ヒロイン。
明るい少女。天然。時々天然Ｓな面も見せる。
ルルや自分について色々知っているようだが・・・？
命の恩人のくれたペンダントを大切にしている。

歌野失人（うたのしつと）　２０歳　男
もう一人の主人公。
お喋り（皆曰く、本人は否定している）
明るい青年。ララの部下であり良き理解者。
ララを子ども扱いしておりその度にララに怒られる。
新米のワールド・ガーディアン。
物事は結構慎重に考える（たまに慎重に考えすぎてから回る事がある）

小原（おはら）　２３歳　男
楽観的な男。
ララの部下。情報管部隊を管理している。
失人同様ララを子供扱いしており怒られている。

カズマ「ララの部下ぁ！？」
ワタル「上司の間違いじゃないんですか！？」
ララ「何故ワタル君が居るかには触れないでおくけど何でそんなに驚くの！？」
ルル「とりあえず・・・。話しに行こう・・・」

四話「仮面ライダーと召集の秘密」

会議室には、士、夏海、ユウスケ、カズマ、ララ、ルル、失人が集まっていた。

「で、何だ？大事な話って」

士はララ達に訊いた。

「うん、皆がこの世界に来たのは、偶然じゃなくて仕掛けられた事なの」

「仕掛けられた事ですか？」

夏海がララに訊いた。

ララは頷いて話を続けた。

「この世界は、数々の世界と繋がった世界なの。誰もが此処に来たいと思えばこの世界に来れる。此処に居る誰かに合いたいと思えばこの世界に来れる。そんな世界なの」

「誰もが自由に行き来出来る世界って事か」

「で、この世界を狙うわる～い奴等が、俺達の世界を襲ってくるから、ワールド・ガーディアンってのが出来たんだ。ワールド・ガーディアンにある部隊はララの応戦部隊。小原さんの情報管理部隊。冷菜さんの物質管理部隊。この三つに分かれてるんだってさ。ま、俺はまだ去年に入隊したばかりだから、あまり分からないんだけどな」

「お喋りな奴だな・・・」

士は失人の言葉につぶやいた。

「でも、最近ワールド・ガーディアンに対抗するように強い敵が現れて、殆どのキーベルトが壊れてしまったの。前も、言ったように」

「ワールド・ガーディアンの中でもとても貴重な物になってしまったて事さ。元々、装着者には色々な厳しい訓練が必要だったのに。それに相応しい者にしか、それは使えなくなってしまった」

「ワールド・ガーディアンの上層部が会議をして厳しいオーディションの末に決められるの」

「しばらくして何も成果が無かったらそれは剥奪。っていう制度に繰り上げられたのさ。でも、今はある二人に安定しているけどな。それがルルと、金銅(きんどう)ロンって奴さ」

ララと失人は交互に説明する。

「成る程な・・・。この世界でも、仮面ライダーは仕事として扱われてるのか」

「ううん、これは、ただのやる事。それをしてもお金をもらえはしないよ」

士の言葉に、ララは返す。

その言葉に、ユウスケは疑問を言う。

「でも、そしたら、子供二人で生活はどうしてるのか？」

「だから、言ったでしょ。喫茶店って。あと、子供扱いしないで」

「喫茶店？って事は、店開いてるんだよな？てか、未成年だよな？二人とも」

「あのね、だから・・・・。まあ、確かに、未成年かもしれないけど・・・。まあ、お店開いてるよ」

ララの未成年という言葉を否定するような言動に士は少し警戒するも、ララ達の言葉を信じて話を聞いている。

「で、大体の事は分かったか？」

失人が訊いた。

「ああ、大体な」

と士が言った。

「・・・・・・・」

ルルは、少し沈黙していた。

会議室での話は、これで解散となった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「カズマ、訊きたい事がある」

ルルは、カズマに訊いた。

「何だ？」

「さっき、士がこの世界でもって言ったけど。そういう世界もあるのか？」

「何で俺に訊くかなあ・・・。まあ、俺の世界では、仮面ライダーっていうのは、仕事になってるんだ。仮面ライダーは会社の社員。そして、俺は其処のエースだったんだ」

カズマは過去を思い出すように語った。

「ふ～ん」

「ま、色々あってさ、降格されて、食堂に入れられて、そして、士と会ってさ。そして、士は通りすがるように、事件を解決して、何処かに消えてしまったのさ」

ルルは、カズマの話を真面目に聞いていた。

「そうなんだ。僕は、誰かに救われた事は、あったのかもしれないけど、覚えてないんだ」

「その後に、士とまた会ったんだ。その時は、ライダー同士で憎しみあい、互いの世界を消しあっていたんだ」

「互いの世界を・・・。でも、それは、そう言われたんだよね。そうしないと、生き残れないって。僕も、そんな事があった気がする。なんだか、誰かを憎んで、でも、それは誰かに止められて、それで

も、誰かを殺した。何だか、そんな気がする」

ルルは、たそがれるように空を見ていた。

「でもさ、その後、ちゃんと消えた世界は復活したんだ。士や夏海、ユウスケ達のおかげでな。俺の世界も一度消えて、でも、戻ったんだ。他の世界も同様さ」

「世界を消す・・・か・・・」

ルルは、その言葉に続けて、まるで何かにそう叩き込まれたように言った。

「この世界は、絶対に消しちゃ駄目だ。この世界と他の世界は鎖のように繋がっている。この世界を消したら、他の世界も引きずられるように消える。って・・・誰かが言っていた気がする。僕の、恩人が」

「ルルの・・・恩人・・・。ララの言っていたラルって人か」

「ルールルー！カーズーマーくーんー！早く来ないと、夜ご飯なくなっちゃうよ～！！！」

ララの呼ぶ声が聴こえた、ルルは、カズマと一緒にララ達の元へ行った。

カズマの頭に、さっきのルルの言葉が張り付いてはがれはしなかった。

（この世界を消したら・・・俺や、皆の世界が消える・・・。そん

な事、絶対させてやるか！！）

続く

四話「仮面ライダーと召集の秘密」（後書き）

ユウスケ「主人公何処いったああああああああああああああああああああああああああああああああああああああ！！！！」
カズマ「ルル」
ララ「ルルは居るよ？」
ルル「ユウスケお前絶対後で締める」
士「ユウスケ、どうした？」
夏海「ユウスケ、何か変ですよ？」
ユウスケ「だってさ！何だか、最後の所主人公がカズマみたいになってたじゃないか！」
ララ「・・・・投稿者がファンだから」
ユウスケ「・・・・分かった・・・。もう何も言わない」

ララ「次回、なんと！あの人が来ます！」
ルル「て事は、情報収集で誰かの情報が得られたんだ」
カズマ「誰か来るんだろうな～（ワクワク）」
士「ユウスケ・・・」
ユウスケ「なんだ？」
士「カズマって、あんな奴だったけな・・・。何だか、さっき副音声でワクワクと聴こえたんだが・・・」
ユウスケ「気のせいじゃないのか？」
士「だと良いんだが・・・」

追記
失人「………」
ララ「ドンマイ！失人君」
ルル「…本当に・・・ドンマイとしか…」

失人「投稿者め…」

五話「新情報と龍騎の登場」（前書き）

カズマ「題名軽くネタバレだね」
ユウスケ「まあ、そんなもんだろう」
ララ「ちなみに、投稿者は最近風魔の小次郎に興味があるんだって」
カズマ・ユウスケ「「それって俺らの俳優目当てじゃないのか！？」」
士「・・・・（この二人の競演は結構あるしな）」
ルル「そういう士も・・・ユウスケの人とはテニミュであるじゃん・・・」
ララ「ブログ見たけど結構仲良いっぽいよね」
ルル「僕も見た。っていうか、投稿者が見てた」
ララ「イケメンとかよくわからないらしいけど、まあ、かっこいいんじゃない？の軽い気持ちで見てるって」
ルル「変な人だよね」

夏海「前回の仮面ライダーディケイドとある世界は・・・」

ユウスケ「カズマとルルの好感度があがった」

夏海「・・・です！」

ルル・カズマ「「おおおおおおおおおおおい！！！！！」」

五話「新情報と龍騎の登場」

「ふあ～」

ララは、自分の部屋で目を覚ました。
昨日は、失人を呼んでこの世界やこの世界の仮面ライダー等について話していた。
ルルとカズマの仲が良くなってた事には、ララは少し気になっていた。

「おはよう、ララ」

ルルが、ララに挨拶した。

「おはよう、ルル。士君に、ユウスケ君も」

「ああ」

「おはよう」

ララは、近くに居た士、ユウスケに挨拶する。

「で、突然悪いんだけど、ちょっと聞きたい事があるの、いい？」

「ああ、いいが。何を聞きたいんだ？」

「貴方達が旅で出会った仮面ライダー達の事について」

ララの言葉に、士は訊ねる。

「何でだ？」

「情報が欲しいから。だけじゃ駄目？」

「まあ、いいが。何から聞きたいか？」

「う～ん、何でも良いよ。思い出せたものからでも」

「そうだな・・・・・・。う～ん、いまいち覚えてない世界があるんだよな。何をしたか何も無かったような・・・」

「それ、何処の世界だ？」

ユウスケの言葉にルルは疑問を持つ。

「確か・・・・」

ユウスケが言おうとしてた言葉を、士が言う。

「龍騎の世界だ。あの世界は、もう何もしなくて良くなったからな。あのままブレイドの世界に行って良かったんだ」

「？？？？」

「ねえ、その話もっと聞きたい！」

ユウスケが何も分からないように考えている横で、ララは士にもっと話を聞こうと訊いている。

「あ？ああ、その世界の龍騎は、辰巳シンジって奴なんだ。まあ、ユウスケが何もせずに別の世界に行ったてのはユウスケ達からじゃ、そうだからな」

「あ・・・・。多分・・・分かった・・・」

ルルは何かを思い出したかのように言う。

「それって・・・・タイムベントっていうのだろ・・・」

「あ、ああ。何でお前、知ってるんだ？」

「わ・・・分からない・・・」

ルルは、うつむいた。

「ルルは、多分。何か、断片的なものは覚えてるんだと思うの。記憶の底で覚えてる事が、あると思うの」

「何で、そのお前がそれを知ってるんだ？」

「それはね、多分、色々な世界のことを調べていたからなの。ラルから聞いた知識。この世界のモノじゃなくなったラルから、色々な事が聞けたの。士君や、カズマ君の事は、ラルから聞いたの。でも・・・」

ララは言葉を詰まらせる。

「でもね・・・。最近、ラルとの連絡がまったく取れなくなったの。この世界から完全に離れてしまったのか、それとも、何かに遮られ

てるのか、まったく分からないけど。それで、毎日やっている、おまじないのようなものがあるんだ」

「それは、何だ？」

ララが取り出したのは、タロットカードの様な物。

「これで、今日や明日に、どんな誰が来るのか、大体分かるの」

ララは、山積みになっているカードの一番上を取り出した。

「ほら、龍騎は今日か明日のうちに、この世界に来る。じゃ、探しに行くよ」

ララは、ルルの手を握って行こうとした。

「ら、ララ。ちょっと待って」

「何？」

「あ、あの・・・人ごみは・・・ちょっと・・・」

「う～ん、じゃあ・・・・」

ララは考えるようにして、言った。

「カズマ君についてきてもらおうかな。何だか、結構仲良いみたいだし」

「お、俺！？」

丁度居たカズマが驚く。

「うん、じゃ、行くよ！」

ララは無理矢理二人を連れて外へ出た。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「じゃあ、まずは・・・。あ、そうだ。丁度良いし、ワールド・ガーディアンの本部にいこうか」

ララは、そう言って、カズマが

「え、でも、それなら、士とか連れて行った方が良かったんじゃないか？」

「ううん、まあ、連れて行くのは誰でも良いし。それに、少し寄るだけだから。少しは顔出ししとかないと、小原さんとかが煩いんだよね～」

（この子って、そういえば、度々子ども扱いしないでとか言うけど・・・。普通の子供じゃないのか、背伸びしてる子供なのか・・・。どっちなんだろう・・・）

カズマはふとララの言動について疑問に思うも、ララに連れられて行く事にした。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

一方、青年、辰巳シンジは、自分が知りもしない場所に居て、少しあわてている。

「こ・・・此処は何処だ？さっきレンさんと一緒に行って帰って・・・。で、家のドアを開けたはずがこう・・・・。う～ん、とりあえず、歩くしかないのか・・・？」

シンジは、先ほどまでパートナーのレンと一緒に取材に行っていた。そして、取材が終わって家に帰るはずだった。
でも、彼は知らぬ間に自分のまったく知らない場所に飛ばされていた。
その時、こんな会話が聞こえた。

「え！？じゃあ。士君達は、許可も無しにこの街うろついてるの！？もう・・・。カズマ君、ルル。仕事増えた。夏海ちゃんからの連絡だけど、士君とユウスケ君が勝手に家出て待ちに行ったって・・・。はあ・・・人探しの仕事が増えた・・・」

「ええ！？はあ・・・士ぁ・・・」

「あいつら、後で締める・・・」

声を発している人物は知らないが、その会話に自分の知る名前が出てきた事にシンジは驚く。

「あの・・・貴方達は・・・！」

シンジは思わずその人達に話しかけていた。

「あ・・・！シンジ！」

カズマは、彼に気付いて、振り向いていた。

「カズマ！」

「二人とも・・・知り合い？」

「？」

少女と少年・・・ララとルルは目の前で起こってることについていけていないが。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「で、貴方が、龍騎の辰巳シンジ君なんだ」

「ああ、僕は、故郷の世界では、カメラマンしてるんだ」

そう言って、シンジは自分の撮った写真を見せる。

「うわあ・・・凄い・・・」

ルルは感心したように言った。

「そういえば、何でカズマ君とシンジ君は知り合ってたの？」

「あ、それは、ライダー大戦の世界っていうので、消滅後、世界が復活したとかいう話、ルルにもしただろ」

「うん。ユウスケや士達のおかげでって」

「で、その時共闘したんだよ。それぞれの世界の仮面ライダー達が」

「その時、知り合ったんだ」

「へえ・・・」

そうやって話していて、シンジは思い出したように言う。

「あ・・・そういえば、士達探してるんだよな？」

「「「ああっ！」」」

「忘れてたのか・・・」

シンジは呆れたように言った。

続く

五話「新情報と龍騎の登場」（後書き）

シンジ「てわけで、辰巳シンジでーす」
カズマ「いよ！」
ララ「ちなみに、投稿者は辰巳シンジの俳優さんはあまり知らないっていうか。リイマジはユウスケ君とカズマ君の人しかあまり興味が無いんだって」
シンジ「それ、僕に締められたいから言ってるのか？」
作者「っていうか、シンジの話し方とか一人称ハッキリ言って覚えてない・・・ｏｒｚ」
シンジ「そうなのか！？」
ララ「う～ん、話に寄れば、普通の時が僕。ヤンデレモードの時が俺らしいって事聞いたけど・・」
ルル「そうなのか！？」

シンジ「・・・・・」

夏海「次回予告！」

士「次回はちゃんと俺やナツミカンの出番はある予定だそうだ」
ルル「あくまで予定・・・（笑）」
シンジ「僕は結構ヤンデレとか言われてるけど、この小説では結構一般人らしいよ」
ララ「次回もお楽しみに！」

六話「捜索と覚醒の瞬間」（前書き）

ララ「なんかサブタイトルかっこいい～」
ルル「厨二っぽいけど・・・」

カズマ「さっきまで作者がオリジのブレイド見てたけど・・・」
シンジ「？」
カズマ「『オンドゥル語』とかいう感じのかつぜつの悪さから出てきてしまった言葉で不意に笑ってしまったって・・・・。超シリアスなシーンで・・・。リイマジの俺から言わせて貰うけどさ・・・。なんか悲しいっていうか・・・なんというか・・・」
シンジ「・・・・・ドンマイ」

夏海「前回までの仮面ライダーとある世界では！」

ララ「士君とユウスケ君が無断で外に出歩いた！」
ルル「その時に、目的の一つである龍騎の捜索を達成した」
シンジ「そして僕達は士を探しに旅に「出てない！」」←ララ

ユウスケ「・・・・」
カズマ「どうしたんだ？ユウスケ」
ユウスケ「シンジって・・・。ボケキャラだったか？」
カズマ「さあ？」

六話「捜索と覚醒の瞬間」

「で、士達は、何処に居るんだ？」

シンジはララ達に訊いた。

「それが分かってたら苦労しないって・・・・」

ララは疲れたように言った。

「だよな」

シンジもそれに同意する。

「・・・・。もしかして・・・・！」

ルルは、何かを思いついたようにララ達に言った。

「何？」

「もしかしたら・・・士達は・・・本部に行こうとしたのかもしれない・・・・。多分だけど・・・・」

「ワールド・ガーディアンの本部・・・・。確かに、それの可能性もある。カズマ君、シンジ君。一緒に来て！丁度本部にも行くところだったし」

「あ、ああ！」

「うん！」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「士～、ノリに乗って出てきたけどさ？その本部って、俺達場所知らないだろ・・・。やっぱ、あの時ララちゃん達についていくべきだったんじゃ・・・」

「仕方ないだろ、其処に行ったほうが良いって気付いたのがあいつらが出て結構経った後だったんだからさ」

士はユウスケに言った。
士とユウスケはララ達に無断で外に出歩いている。
実は、彼女達からは無断で外出してはいけないと言われていた。
その理由は、彼らがまだ此処の地理に詳しくないのと、命を狙われる可能性が高いからだ。
彼等は戦闘慣れはしているものの、一気に襲い掛かられては流石に持たない、と彼女が判断して無断で外出してはいけない事になっている。

「後で締められても知らないぞ・・・」

「その時はお前も一緒だ。俺とお前は共犯なんだからな」

「うう・・・・」

士の言葉に反論できないユウスケ。
その時

「ｆ：ｅｉｆｇｊｅｒｏｉ：ｇｊｅ：ｏｔｉｊｇ：ｅｉｏｊｒｔｏ

ｄｃｄ＆ａｍｐ；ｋｕｕｇａｏｅａｒｇｎ；）））」

「こいつらはっ！」

「この世界を脅かしてるとか言う奴らか」

士とユウスケはそれぞれ言う。

「ユウスケ、行くぞ」

「ああ！」

「「変身！！」」

二人は変身した。

クウガと、ディケイドが、其処に立っていた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「本部には来てない・・・ですか・・・。分かりました。小原さん」

「ああ。それにしても、これがララちゃん達の仲間か。宜しくな。俺の名前は小原だ」

一方、ララ達は本部に来ていた。

ララ達と小原は軽く会釈をして、話していた。

「此処が、ワールド・ガーディアン本部・・・」

「で、あいつらは、出てる？士君達が狙われて、彼等は無事とはい

えないんじゃないの？」

ララは小原に聞く。

「ああ、あいつら・・・ロベターは、現在この本部の近くで暴れているとの速報があった。其処で、ピンク色の仮面ライダーと赤い仮面ライダーが戦ってると聞いた」

「ディケイドと・・・・クウガ？士君達だと思う・・・。カズマ君、シンジ君、ルル。行くよ」

「あ、ああ、ちょっと待て！」

「何？」

カズマは、ララを引き止めた。

「何で、君も行く必要があるのさ！俺達だけが行けば良いんだろ！」

カズマはそう言って、自分だけで行こうとした。

「私にも、行く義務があるから」

そう言ったララの表情は、１３歳とは思えないものだった。

「とにかく、だからと言って君もいく必要は無い。俺達だけで行くから、じゃ、ルル、シンジ。行こう」

「・・・・うん。僕も、ララを巻き込みたくないから・・・」

「じゃ、僕も」

そう言って、三人は出て行った。

「私だって・・・。行く義務があるんだよ・・・。行かなきゃ、いけないんだよ・・・」

ララは、そう言って立ち尽くしていた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「ぐはあっ！」

「ユウスケ！」

「ｎｖｎｆ：ｉｏｎ：ｙｏｕｅａａｅｕｏｗａ；３３８３２０３９５２０８７４２８７ｒｕｆｒ９４」

機械の様な敵・・・・ロベターはユウスケを飛ばし、士のもとへ近寄ってくる。

「・・・・くそっ！」

士の前には、数十体ものロベターが居る。

「それだけ、俺達が此処に居るのが気に食わないのか！」

数十体を二人で相手にするのは、結構難しい事だ。

士は、それでも無理をして戦っている。

「お、敵さん発見～♪ルン。狙撃よろしくな」

「はいはい・・・。あんた、無駄に格好つけなくていいから、さっさとやれ！」

突然現れた二人組は、片方の女が男の方を蹴り飛ばしていた。

「いててて・・・。ルン！痛いだろ！」

「そんな事どうでも良いから、さっさとその人達助けなさいよ！あんたも一応資格者なんだから！」

「はいはい！わーったよ！じゃ、行くぜ・・・変身！」

彼は、黄色に黄金の装飾の入った大きい首輪のような錠前・・・ペンダントキーに鍵を差込み、変身した。

「貴方達が、ララちゃんの言ってた仮面ライダーね。私の名前は金銅ルン。あっちは双子の弟のロン。そして、あの仮面ライダーは、この世界に残った数少ないライダーの一つ。仮面ライダークレンシェ。じゃあ、早く貴方達は逃げて！その体じゃあ、ロクに戦えないでしょ！」

「・・・・・・ああ！分かった。ユウスケ、逃げるぞ！」

「あ・・・・・ああ・・・・・」

士とユウスケは変身をとくと、二人でその場を離れようとした、だが。

「f；eoituhr；eaauith；eth！！！！」

「くそっ！」

行く手を阻まれたのだ。

「待て！」

「ソイツをやるなら・・・僕達をやってからにしろ」

「士、ユウスケ。久しぶりだな」

カズマ、ルル、シンジが来たのだ。

「シンジ・・・！お前も来てたのか！」

「ああ、じゃあ、行くぞ！」

「「「変身！」」」

三人は変身した。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「やっぱり、私も行かなきゃ。行かなきゃ・・・駄目なんだ」

そう言って、ララはその場を後にして、ルル達の所へ行こうとした。

その時、ララはふと、思い出した。

「そういえば・・・昨日、龍騎の事を聞く前に、呼んだはずの仮面

ライダーが居るんだ・・・」

仮面ライダーカブト。
ララが、彼がもう既にこの世界に居る事を知るはずが無い。
彼は、まだクロックアップの世界に閉じ込められてるのだから。

「まさか・・・」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「くそうっ！こんなに人数が居てもだめなのか！」

カズマが嘆く。

「ロベターは結構強いらしいからな、ある程度力があるはずのこの世界の仮面ライダーさえも殆ど壊した相手だ。だいぶ強いだろう・・・！」

ルルも結構苦戦している。

その時だった、一瞬、何か赤いのが通り過ぎたような気がした。
そして、ロベター達は一瞬にして壊れ、動かなくなっていた。

「何だ！」

「あれは・・・赤い仮面ライダー・・・」

ルルは、脳裏に一人の仮面ライダーが思い浮かんだ。

「カブト・・・か・・・」

続く

六話「捜索と覚醒の瞬間」（後書き）

シンジ「は～い、じゃあ、自己紹介お願いします」

ロン「金銅（きんどう）ロンだ！」

ルン「金銅ルンです。ロンが煩いと思いますが、気にしないで下さい」

金銅（きんどう）ルン
１８歳　女
しっかりしている少女。
ララとは結構前から知り合っている。
ちなみに結構戦闘慣れしている
ロンのよき姉でありストッパー

金銅ロン
１８歳　男
仮面ライダークレンシェの装着者。
はっちゃけた性格の青年であり、結構ルンに怒られている。
記憶を失くす前のルルを知っている人物。

ロン「だ！」
ルル「煩い、黙れ」
ルン「あ～そうそう、そんな風に前も罵られてたのよね～」

七話「クロックアップと誤解の連鎖」（前書き）

ソウジ「よ」
ララ「・・・・。作者・・・」
作者「はい・・・」
ララ「まず、タクミ君に謝ろうか、順番、最初に決めてたのに出てたの、タクミ君だよね？ソウジさんより先に」
ソウジ「・・・俺もすまない・・・」
作者「すみませんすみません。何故か話がそう進んでしまいました」
シンジ「でも今回でるよな？タクミ」
ララ「そうだったの！？」
ルル「大丈夫だ。出ることすら無いと思う電王よりはましだから」
カズマ「成る程、出ん王か・・・」

カズマ以外全員「・・・・・」

カズマ「・・・・」

七話「クロックアップと誤解の連鎖」

「カブト・・・？」

ルルは、不意にそう言い放っていた。

「カブトだと！？ソウジがもうこの世界に来てるのか！？」

士はそう言う。

「でも、今・・・赤いカブトムシ・・・の様なライダーが見えた・・・」

「確かに、あの世界のカブトは、クロックアップの暴走で、ずっとあの状態だ。この世界に来てもそれが直ってないなら・・・」

ユウスケもルルの言葉に同意する。

「でも、ララ達にカブトの情報は無いんじゃなかったのか？」

士は疑問に言った。

「分からない・・・。でも、僕はカブトを知っている。何故か分からないけど・・・」

「ルル、カブトの情報。ララちゃんが持っていたはず」

先程の少女・・・金銅ルンが言う。

だが、ルルはルン達を知っていようがいまいが、ルルは記憶喪失な

ので、ルン達のことを覚えていない。

「誰・・・？君達は・・・」

「・・・おいおい、冗談はよしてくれよ、ルル」

ロンは肯定したくないように言った。

その表情は少々青ざめている。

「ごめん・・・分からない・・・」

「成る程、それがララちゃんが暫く本部に来なかった意味ね。で、ララちゃんは？」

「ああ、それは俺達が本部とやらに置いて来た」

「ララが・・・危険な目にあうのは・・・嫌だから・・・」

カズマとルルが説明する。

「とりあえず、本部に行きましょうか」

ルル達は、本部に行く事となった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「カブト・・・。そういえば、もうこの世界に来てるはずなんだ。ラルから聞いた情報だと、クロックアップの世界に閉じ込められてるって言ってたんだ・・・。何で、その情報忘れてたんだろう・・・。まあいい。今から、カブトを捕まえに行こう」

そう言って、ララは本部を出た。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「「「「「入れ違い！？！？？！」」」」」

小原の言葉に、ルル達は驚愕する。

「ああ、さっきララちゃんはカブトがなんとか～とか言って出て行ったぞ」

「何で・・・引き止めなかった・・・！」

ルルは、怒ったように小原をにらみつける。

「アイツ、絶対聞かなかったぞ、誰が言ってもな、ルル。お前は覚えていないようだが、ララちゃんには色々あるらしい。お前にもな。ラルの残した言葉に従って、自分がやりたいようにやっているんだ。ララちゃんはな」

「・・・・」

流石に今の小原に言葉に、何も言い返せないのか、ルルは黙る。

「でも、カブトがなんとか～って、カブトを探しに行ったのか？ララは」

「「「あ」」」

そうだ、生身の人間である筈のララには、クロックアップの世界に閉じ込められたカブトを捕まえられる筈が無い。
捕まえられるとしたら、クロックアップ中のカブトと同じマスクドライダーか、ワームだけである。
ララがどっちでもある筈が無い為、ララはどうやってカブトを捕まえようとしているのだろうか？

「・・・・・」

「お前でも良いのか？仮面ライダーの情報を聞かせるのは」

カズマが言った。

「うん・・・そうらしい・・・」

「士、他のライダーについて何かルルに話せ」

カズマは、何を考えてるのか士に別のライダーの情報をルルに提供するよう問い詰める。
ルルは、その考えをもう理解したようだ。

「？どういうことだ？カズマ」

「・・・士・・・。僕からもお願いだ・・・」

「ああ・・・まあ、良いが。そうだな・・・少し、トラウマになった世界があるな・・・」

士は、思い出すと溜息をついた。

「その世界のライダーは、５５５だ。変身者は尾上タクミ。スマートブレイン高校の学生だ」

士はその世界の仮面ライダーについて話していた。

（ラル・・・。この情報、聴こえてる・・・？）

（聴こえてるよ、ルル。今から５５５をこの世界に送ります。それと、ララに言ってください今まで連絡を取れなくてごめんなさい、と）

「・・・！」

「どうしたんだ？ルル」

カズマがルルに訊く。

「今・・・ラルが・・・」

「え！？」

その言葉にシンジは驚く。

シンジも、ララからラルについての話は聞いていた。だからこそ驚いている。

「５５５はもう・・・すでに・・・この世界に来ている・・・」

ルルは、何かに導かれるように歩き始めた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「ラル・・・」

一方、ララはラルの声を聞いて安堵の息を漏らしていた。

「良かった・・・。あ、そうだ。カブトを、探さなきゃ」

ララは、再び歩き出していた。

「５５５は、ルルが探してくれる・・・か・・・」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「此処は・・・何処だろう・・・」

尾上タクミは困惑していた。

いきなり知らない場所に来たら、誰だって困惑する物だ。

困惑しないのは、慣れているか、ただマイペースなだけだ。

「はあ・・・」

ちなみに、彼は学校から下校中だった。

家に入ろうとドアに手をかけ、家へ入ろうとしたら、まったく知らない場所に来ていた。

龍騎とほぼ同じなのには突っ込まないでおこう。

「・・・・・」

タクミは、呆然と立ち尽くすだけだった。

続く

七話「クロックアップと誤解の連鎖」（後書き）

ルル「・・・そういえば、ソウジはまだ話していないから、タクミのほうが先に出たって事になる・・・・」
ララ「あ！」
シンジ「そういえばさ、ルルってヤンデレって設定だけど、どんな感じなんだろう・・・」
カズマ「元祖ヤンデレが言うか！？」
シンジ「カ～ズ～マ～・・・」
ルル「・・・」←カズマにぴっとりくっついている

ユウスケ「ルルはララちゃんかカズマ関係で病むに一票」
士「・・・俺もそれに一票入れておこう・・・」
夏海「私もです・・・」

次回予告
ルル「カブト捜索をするララ。５５５捜索をする僕達。そして、知らぬ場所に来て困惑しているカブトと５５５こと尾上タクミ。その四つは、いま、重なり合う」

ルル「はあ・・・。急いでるからって・・・これはないだろう・・・」

八話「引導とタクミの不安」（前書き）

ララ「あ、言い忘れてたけど・・・」
カズマ「？」
ララ「サブタイトルの法則って結構あるよね？」
カズマ「ああ、例えばキバは～楽章とか、ＯＯＯは○○と○○と○○とか、Ｗは○○○○／○○○○とか、フォーゼは四字熟語みたいなのを・て区切ったりとか・・・だよな？」
ララ「うん。で、この小説のサブタイは大体○○と○○の○○だよ」
ルル「作者の・・・無い頭を・・・・使った結果・・・らしい・・・・」
カズマ「成る程な～」
ルル「前回のサブタイ、話に合ってなかったな・・・。作者後でとっちめる」
ララ「今回は会ってますように・・・」

八話「引導とタクミの不安」

「５５５・・・・何処に居る・・・」

「ルル！待て！待てって！」

カズマが呼びかけてもルルの足は止まらない。

「いきなりどうしたんだ？アイツ」

シンジは疑問に言う。

「多分、導かれてるんだと思う」

ルンが言った。

「それ、どういう事だ？」

士がルンに訊ねる。

「だから、ルルを追って行けば、５５５に会える可能性があるの！ごちゃごちゃ喋ってないで、早く行かなきゃ、ルルを見失うわよ！」

ルルの足はどんどん速くなっていってる。

もうルルは走っている。ルルは結構足は速い方なのか、中々追いつけない。

「５５５・・・・尾上、タクミ・・・」

ルルは、そんな事を呟きながら、走って行っていた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「はあ〜、もう、参ったよ・・・。此処って、何処なんだろう・・・？」

タクミは、もう立っているのにも疲れ、近くの椅子に座り込んでいた。

自分が居る場所が何処なのかも分からなくなり、もう何をすれば良いのか分からない状態だった。

「此処は、僕の居た世界じゃないって言うのは、分かってるんだけどな〜。はあ・・・今頃、由里ちゃんは何してるのかな〜？」

自分が好きな人のことを思い浮かべながら、タクミは呆然としている。

その時だった。

『不穏分子発見、直チニ破壊行動ニ移ル』

「・・・・！？」

彼の周りに、機械の様なものが居たのだ。

「何だこれ・・・。どういう事だよ・・・」

不穏分子？破壊？

彼には何が起こってるのかもわからなかった。

まだ状況を理解で来てない彼には、逃げると言う方法しかなかった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「・・・・555が、襲われている・・・・」

もうルルの後ろには誰も追いついて来ていない。
ルルは、555が何者かに襲われている、そう頭に響く声に従って来ていた。

「ちょっと！何だよ！僕が何で襲われなきゃ・・・！」

其処には、青年が居た。
灰色の制服を着ている、どうやら学生なのであろう。

「・・・・・・・」

其処で、ルルは倒れた。
ルルの頭に響いていた声は、もうルルには聴こえてない。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

タクミが何者かに襲われている時、カブト・・・ソウジは、何者かと対面し、ベルトを直してもらっていた。

「これは一時的なものだから、この世界を出ると、反動で壊れ、またクロックアップの世界に戻されてしまう、それでも良い？」

「一時的にでも・・・止まるのなら・・・。俺は少し、クロックアップの世界に居すぎて疲れたようだ・・・」

「分かった。じゃあ、私は行くね」

その時、クロックアップは解け、ソウジは変身をとき、呆然としていた。

「それにしても・・・先程の者は・・・・」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「大丈夫？君・・・」

タクミは、追われている最中に、倒れているルルを見つけ、逃げながら彼を連れていた。

現在、廃墟となっている場所を何とか見つけ、其処にタクミは隠れている。

「此処・・・は・・・・・」

「どうやら、何かの工場の跡地みたい・・・。僕にも、何が何だか分からないけど・・・」

記憶を失くしているルルにとっても、この世界に来てまだ数十分くらいしか経ってないタクミにとっても、この世界の地理には詳しくなかった。

「・・・・。お前は・・・誰だ・・・？」

「あ、自己紹介が遅れたね。僕の名前は・・・」

タクミが其処まで言いかけたとき、あの機械の様なものが襲ってきた。
此処を感知したのだろう。
『検索完了。コノ人物ハ、オルフェノクト感知シタ。今直グニ破壊セヨ』
「・・・・？」
「・・・・！何で・・・それを・・・」
ルルには、何が何だか分かっていない。
一方、タクミは、自分の正体を暴かれて焦っている。
その機械が自分を追っている理由を分かったようだ。
そう、その機械はワールド・ガーディアンの作った、人に紛れる人で無い者を見つけ出し、破壊する機械、ブレイカーロボットだったから。
「・・・・。これは、ワールド・ガーディアンの機械・・・。何で、それが彼を追う・・・？」
ルルは、タクミの事をまだ分かってない為、怪物を倒すための組織が、なぜ彼を追うのかが分かっていなかった。
「ワールド・ガーディアン・・・？うっ！」
タクミはルルの言葉を疑問に思うも、ブレイカーロボットに不意を打たれる。
「お前・・・・僕と・・・・来い！」

ルルは、やっとの事でタクミを連れ出し、無我夢中に走るのだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「駄目だ！もう完全にルルを見失った・・・」

「カ～ズ～マ！そんなすぐにあきらめるな！きっとフラ～っとタクミ連れて戻ってくるってさ！」

諦めるカズマにシンジが慰める。

「でもさ、ルルって、記憶失くしてるんだろ？なら、フラ～っと戻って来るって、可能性無いんじゃないのか？」

カズマの言葉に、全員暫く沈黙する、が。

「「「ああああああああああああああああああああ！！！！！！！！」」」

カズマの言葉は、最もだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「くそっ！・・・・此処は・・・・何処だ・・・！」

「ええ～！？君も分からないの！？」

ルルの言葉にタクミは本当にこれで良いのか？と思いながらも、何をすれば良いのか分からないため、ルルに着いて行く。

『gffff；eortihyj；t44493955555dithn：rtiojy：estiyj』

「これは・・・！」

タクミとルルの行く先に、ロベター現れた。

「君！これはさっきのと何か違う！何だ！？」

「君・・・・じゃない・・・。ルル・・・だ・・・。これは・・・・ロベター・・・。僕達の・・・敵・・・！」

タクミの言葉にルルが答える。

その間にも、ロベターはルル達に近づいている。

ルルは、自分のポケットからフォルティのキーベルトを出し、変身した。

「・・・・変身・・・！」

「君も・・・ううん、ルル君も・・・仮面ライダーなんだ・・・」

ルルは、タクミのルル君もという言葉に、疑問を持ちながらも、戦いに挑んだ。

「はあああっ・・・・・！！！」

「ルル君が戦うなら・・・僕だって！」

タクミは、ファイズギアとファイズフォンを取り出し、変身する。

「僕も仮面ライダーなんだ！変身！」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「もしもし？ルンです・・・。はい、はい。分かりました」

「どうしたんだ？ルン」

ルンが電話をしていた。それに、ロンが何をしていたのか訊ねる。

「ロベターが現れたそうよ」

「何だと！」

「シンジ・・・」

「分かってる、カズマ」

「なら、俺達も！」

「ユウスケ達はまだ傷が残ってるから、もう少し安静にしてろ」

シンジとカズマがルン達に着いて行ってロベターを倒しに行こうとする中、ユウスケが行こうとして、シンジに止められる。

「でも！」

「ユウスケさんは、クウガのベルトの力ですぐに回復できる筈です。
では、行きましょう」

そう言って、ルン達は急いでロベターの出現したところに向かって行った。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ソウジは、ふらつきながらも歩いていた。
数え切れないほどの時間、クロックアップの世界に居たのだから、いきなり開放されて体が追いついていないのだろう。

「ふう・・・・」

クロックアップの世界から出て、何をすれば良いのか分からないまま、彼は歩いていた。
そして、偶然、その現場に出会った。

「ぐああっ！」

「タク・・・ミ・・・！」

『ｓｅｉｌ；ｓｕｇｏｒｈ：：；ｒｏｉ８ｈｔｇｙ；ｅｗ８４ｈｇ，ｒｈｇｓｕｈｅ””』

彼は、一方は見た事のある仮面ライダーだったが、もう片方は見た事も無かった。

「何だ、あれは一体・・・」

それよりも、彼が驚いたのは彼らが戦っている相手だった。
自分の世界でワームと戦っていてそういう戦いの場面というのには慣れていた。
だが、やはり見た事も無い相手には、彼は少々戸惑う。
戸惑いながらも、彼は変身していた。

「変身！」

「キャストオフ！」

そして、彼は続いてキャストオフし、その戦いの中へ走っていった。

続く

八話「引導とタクミの不安」（後書き）

シンジ「・・・・」
士「・・・」
カズマ「何だか、ソウジさんかっこいいね・・・！」
ルル「・・・・・・」←タクミとカズマに引っ付いている
タクミ「え？ルル君・・・あの～」
カズマ「士、今回殆ど喋ってないね」
士「うっ」←結構来る
ユウスケ「・・・orz」←ほぼ同じ状態
夏海「・・・・」←存在すら出てこなかった
モモタロス「ぐあああああああああ！！！」←本編にすら出てない
タクミ「あのさ・・・カズマって・・・」
カズマ「何だ？」
タクミ「この状態、どうとも思わないの？」
現在、ルルがタクミとカズマに引っ付いてる状態。
カズマ「あ～、慣れ？」
タクミ「慣れちゃったの！？」
シンジ「・・・・」←やってもらいそうに見てる

九話「遭遇とシンジの奮闘」（前書き）

ララ「・・・」
シンジ「・・・。サブタイ、僕に何が起こるんだろうね」
ルル「・・・」
カズマ「・・・あっぱれ、シンジ」
シンジ「いやいやいや・・・何が起こるんだよ！」

九話「遭遇とシンジの奮闘」

「カブト・・・」

ルルが呟いた。

「カブト？うあっ！」

ルルの言葉にタクミは動揺するも、ロベターに邪魔される。

「成る程な。これがこの世界での敵か」

ソウジは納得したように言う。

「ｄｄｄｈｏｉｒｈｇ，ｅｏｉｒｔｈｇ，ｅｏｒｉｈｒ」

「・・・タクミ、オートバジンを・・・呼んで・・・くれるか・・・？」

「ルル君、何で、それを・・・。まあ、良いか」

そう言って、タクミはオートバジンを呼ぶ。

「よし・・・シンジ・・・其処に・・・居るんだろ・・・。ドラグレッダー・・・・を・・・呼んで・・・・くれ・・・」

「うげっ、いつから知ってたんだよ。まあいいや」

そう言って、シンジもドラグレッダーを呼ぶ。

ルルの考えはよく分からない。
でも、二人がそれぞれ呼んだものをルルは見て、こう言った。
「ドラグレッダー・・・を・・・特攻・・・させて・・・。オートバジンで・・・援護・・・してくれ・・・。その間に・・・三人で・・・叩く・・・・」
「成る程な。分かった」
「うん」
「あと・・・カブト・・・お前に・・・頼みごとがある・・・・」
「ああ」
「クロックアップで・・・一緒にアイツを・・・叩いてくれ・・・・」
「ああ、分かった」
そう言って、ソウジはクロックアップする。
「3，2，1，・・・今だ・・・・・！」
その一瞬で、ロベター達は倒れた。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
「まったく・・・ルルは見失うし、シンジはさっさと何処か行っちゃうし・・・・。ロベターは現れるけどどうやらシンジ達がやっちゃったらしいし・・・」

カズマは途方に暮れていた。

「まあまあ、私達が出向かわなくてもファイズとカブトが見つかったんだし、いいでしょ」

「でもな～」

「私達は、ワールド・ガーディアンに行くから、カズマさんは其処で待っててください」

「は～い」

その時、カズマは誰かとぶつかった。

「うぇいあっ！」

「・・・！」

其処には。長い髪の毛を後ろで軽く束ねている・・・・少年なのか少女なのか分からない人物が立っていた。

「お前は、誰だ？」

「・・・・」

その人物はその場から立ち去ろうとするが、こける

「いてっ！」

「お前、怪我してるじゃねえか。まったく、何してるんだよ」

「な、治さなくて良い・・・。俺は、あまり・・・人と触れ合うのが嫌なんだ・・・・」

声や話し方からして少年の様だ。
人と触れ合うのが嫌。その言葉に、カズマはふと、ルルを連想する。
彼は、なんとなくルルに似ている。
兄弟なのだろうか？だったら、ララとも兄弟という事になる。
それを訊こうと思ったが、今訊く事ではないと思い、カズマは怪我を応急処置ではあるが治療していた。

「これ、血止めとかないと、悪化するぞ」

「あ、ああ・・・」

しばらくして、彼は口を開いた。

「お前、名前は何だ？」

「俺？俺は剣立カズマ。お前は？」

「・・・・アクア・・・」

「アクア？ふ～ん、変わった名前だな」

「変わってる・・・。よく言われるな。ま、ララやルルも、そんな感じだしな」

「そうか！やっぱり」

カズマは突然分かったように言う。

「はあ？」

「いや、俺は最近だけど、ララやルルと知り合ったんだ。ルルに凄く懐かれて・・・」

「ルルがか？」

アクアは凄く半信半疑に訊いてくる。

「あ、ああ・・・」

「ふ～ん、ルルも、こんな奴に懐くんだな～」

「こんな奴！？」

「・・・・何か、”人じゃないモノ”を、感じたからか？」

アクアの一言に、カズマは疑問を感じる。

「”人じゃないモノ”？」

「ああ・・・。ま、俺からは何も言えないがな。ありがとな、カズマ」

そう言って、アクアは立ち去った。

「人じゃないモノ・・・・。もしかして・・・・」

カズマは、ある事を思いつく。

「なら、もしかして・・・」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「・・・・・・」

「あはははは・・・・・・」

「・・・・・・」

「何よこの状態！」

シンジが現状について突っ込む。

ちなみに、現在はルルがタクミにべったりしていて、ソウジはそれを見て呆然としている。

「何で、コイツはお前にべったりしているんだ？」

「分からない・・・」

「・・・・・・」

「あ、シンジく～ん！ルル～！ソウジさ～ん！あと・・・タクミく～ん！」

「タクミ君！？」

ララが来た。タクミはララの呼び方に驚く。

「あれ、ララ、ソウジさんの事知ってる？」

「あ・・・えっと・・・。彼がクロックアップの世界から出た時に、で、此処に来るように・・・」

「・・・まあ、そんな所だ」

なんとなくララのそぶりは誤魔化す感じだったが、シンジは気にせず話を続ける。

「で、カズマ達どうしたんだっけ？僕」

「シンジ～！お前俺達置いてったな～！！！」

「あ・・・スマン」

「スマンじゃねえ～！！！」

「まあ、一件落着？」

そう言って、ララは笑った。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「さてと、で、カズマ君、どうしたの？話って」

此処は喫茶店マリンチェリア。

ララ達の経営している喫茶店だ。

「あ、さっきさ、アクアって少年に会ったんだ」

「あ、アクア！で、どうしたの？」

「ルルが俺に懐いてる理由・・・でさ、”人じゃないモノ”を感じるから、安心出来るって、もしかしてさ、タクミに懐いてるのもだけどさ・・・・」

「あ、それね・・・。確かに、ルルは、少しでも人じゃないモノを感じる事が出来るの。仮面ライダーにも、居るんだね。微かでも、人じゃない何かを感じれれば、ルルは安心できるんだね」

「そっか・・・」

「でも・・・なんで、カズマ君に懐いてるのかな？」

ララはカズマに訊く。

「へ？気付いてないのか？」

「え、気付いてないって・・・」

「あ～、今だから言うけどさ、俺が使ってるブレイドは、アンデッドを封印してるこのカードを使って変身するんだ。で、ブレイドになってる時はアンデッドと融合してるんだよ。一番最強のキングフォームを使い続けると、完全にアンデッドになるらしい。ま、それになる物なんて俺は見つけてないけどな」

「成る程・・・」

「でも、何でルルは人じゃないモノを感知すれば安心するんだ？」

「それは・・・。まだ、いえないな」

「言えないなら、別に良いけど・・・。じゃあな、時間とった」

「良いよ。あまり答えられないかもだけど、疑問に思った事は何でも訊いてね」

「・・・・ああ」

そう言って、カズマはその場所を後にした。

続く

九話「遭遇とシンジの奮闘」（後書き）

ララ「・・・シンジ君の奮闘って？」
ルル「・・・突っ込み部分？」
シンジ「・・・タイトル詐欺」
カズマ「・・・だな・・・」

シンジ「てか、ルルがタクミとカズマに懐いてる理由って・・・それか！」
ララ「まあ、人外の何かを感じれば、実際に人間でも懐くけどね」
シンジ「それって人だけど人じゃないって感じだよな！？一体どういう状態だよ！」

カズマ「何気にキングフォームの話してるな」
ララ「確かに。何か、出るフラグが・・・」

十話「失踪と少年の涙」（前書き）

ララ「今回からシリアスに突入していきます！」
ルル「・・・失踪・・って・・・誰が・・・失踪・・・するんだろう・・・」
シンジ「実は○○○○○○（いえません）」
ルル「・・・まさか・・・！」

十話「失踪と少年の涙」

「あ、おはよう。ルル」

「おはよう・・・ララ・・・」

ルルは、軽くララに挨拶すると、椅子に座った。

「おはよう。ルル、ララ」

「カズマ、シンジ・・・おは・・・よう・・・」

ルルは、たどたどしくもカズマとシンジに挨拶する。

「ルルも、人と話すの、だいぶ慣れて来たっぽいね～」

ララは感心しながらも、朝食を作る。

「士達は？」

カズマがララに尋ねる。

「士君達は、写真館を見に行くって言って、さっき此処を出て行ったところだよ。まあ、ルン達も同行してるから、あまり心配はないと思うよ」

「そうか・・・」

カズマは安堵の息を漏らす。

「で、別の仮面ライダーの情報、入ったのか？」

「う～ん、さっき、ユウスケ君からは、キバの事を聞いたよ」

「キバか・・」

「あ、ソウジさん、おはようございます」

ララは、丁度起きていたソウジに声をかける。

「俺達は君つけだったのに、ソウジさんはさんつけか・・・」

等と、カズマが嘆き、タクミが抑えていたが。

「まあまあ、抑えてください。カズマさん」

「ソウジ・・・も・・・カズマ・・・・達と・・・ライダー・・・・大戦・・・で・・・・戦った・・・のか・・・？」

「ああ、共闘したな。あの時は、士に助けられた恩だ。で、今回は、ある人に一時的にだが、クロックアップの部分を直してもらってな、それの恩だ。それに、俺の世界も危機に晒されていると聞けば、誰だって協力するさ。自分の世界を思ってるならな」

「そう・・・・・か・・・・・」

そう言って、ルルはカズマの後ろに隠れてしまった。

「ごめんね～、ルルは、まだ人と触れ合うのが、たどたどしいくら

いだから・・・」

「そうか、すまないな」

ソウジは謝罪する。

「ううん、いいよ」

その日、ロベターは出なく、士達も無事、写真館にたどり着いた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

その夜の事だった。

「・・・・・・・これが、実験体Ｐ－Ｒ０１なのか？」

少女は、窓からララの様子を伺っていた。

「らしい。俺達だけで行くぞ」

「わかった」

「・・・！」

自分の部屋で寝ようとしていたララは、悪寒を感じ、誰も巻き込まないように、外へ出た。

その時、ナイフが飛んできた。

「・・・・貴方達は・・・」

「来た来た～、へえ。こんな子供なんだ～」
「見た目だけで惑わされるな。コイツは、見た目よりも長く生きているからな」
「は～い♪」
「・・・・！強い・・・・・」
ララの表情は、まるで、先ほどカズマ達と笑っていたような笑顔じゃなかった。
ララは、二人と交戦しながらも、喫茶店の方を伺っていた。
「何余所見してるのさ！」
「うっ！」
ララは怪我を負い、地面に叩きつけられた。
「ほら、もう終わりだよ」
「待て」
「何？止めないで」
ララに止めを刺そうとする少女を、青年が止める。
「コイツは使えるな。ただの人間じゃない。ただの実験体じゃないって事か」

「あ、もしかして、コイツ。昔逃走された、成功例って奴～？でも、さっきの強さはどう見積もっても普通の人間。人外っていうのは無いんじゃない？」

少女は呆れたように言う。

「だな。そうだ。このペンダントを取ってみようか」

青年が、ララのつけている青いペンダントを引っ張る。

「駄目・・・これ、だけは・・・・」

ララは最後の力を振り絞って言う。

「何、まだ喋る余裕あったの？てか、駄目って言われると、逆にしたくなる人の性って知ってる？ま、僕達は人じゃないけどね。アーッハッハッハ！！」

「・・・・・・うっ！」

「このペンダントはどうする」

「う～ん？このまま終わっちゃ楽しくないし。あ、そうだ！ここに置手紙みたいにさ、コイツは預かった。っていう感じに置いとけば、あいつらも来るんじゃない？そしたら絶対楽しいさ！」

「ふ、久々にお前の意見に賛成してみるさ」

「オッケ～、じゃ、早速コイツの身柄確保～」

そう言って、二人とララの姿は消えた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「・・・・・ララ！！」

朝が来た。
いつも朝起きたときにララが居る場所に行ってもララは居ない。

「ララ！」

少年にとって、彼女が居ないのは初めてのことだった。

「ララ！何処に居るんだ！」

ただ、大切な存在が其処に居ないと言う事だった。

「ルル！落ち着け！」

「これが落ち着いて・・・居られる・・・か！」

カズマがルルを止めるも、ルルは止まらない。

「ルル！」

遂に、ルルはカズマを振り切って外に出た。

「・・・・どうしたんだ？いきなり、ルルが外に出て行ったが」

「ララが、居なくなったってさ」

「何だと？」

ソウジは、眉をひそめた。

「そういえば、昨日の夜。ララちゃんを見なかったような・・・ふと、昨日夜中に起きたんだけど・・・ララちゃんが外に行くところ見たけど・・・」

タクミの言葉に、カズマは不安を覚える。

「・・・・・」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「ララは・・・何処に・・いったんだよ・・・！」

ルルは、ふと、立ち止まった。

そして、落ちているペンダントを拾った。

「これって・・・まさ・・・か・・・・」

それは、ララのつけていたペンダントだった。

「そんな・・・そんな・・・・」

ルルは膝から崩れ落ちるようにうなだれる。

「どうしたんだ、ルル」

「・・・・シン・・・・ジ・・・・」

其処に、丁度シンジが立っていた。

「ルル、とりあえず、落ち着いて、話を整理しよう。お前の精神が不安定っていうのは、僕も知っている。だからこそ、整理しなくちゃいけない。分かったか？とりあえず、最初にルルの話を聞くからさ」

「シン・・・ジ・・・・・うわああ！！！！！！！」

「記憶喪失の事もあるから、今泣くのは許してやる・・・」

シンジは、ルルの持っているペンダントを見た。

(これは、ララの首からかけていたペンダント・・・)

シンジは、大体の事はララから聞いていた。
そのペンダントが、ルルも同じ物を持っていて、とても大切な物だと、ララは言っていた。
だが、ルルもペンダントを今つけている。
ルルの持っているそのペンダントは、ララの物だとしか考えられない。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「じゃあ、話を、整理しようか」

ひとまず、喫茶店に戻ったシンジとルルは、今までの事を皆で振り返っていた。

「僕は・・・此処にある、僕の部屋のベッドで目を覚ましたんだ。その時には、ぽっかり、殆どの事が抜けていて、何があって僕が居て、僕の家族はどうでとか、そんな事は知らなかった」

「で、其処にロベターってのが居たんだろ」

士が訊く。

「うん・・・でも、僕が記憶を失くす以前から、そのロベターというのは居たらしい。ララが言っていた」

「で、このワールド・ブリッジに危機が訪れて、この世界が壊れると他の世界も壊れる。だから、他の世界も守る為に、俺達様々な世界のライダーを呼ぶ事にした。だろ？」

カズマが訊く。

「そうだ・・・だから。ララと協力して、仮面ライダーの情報を集めていた」

「成る程・・・で、問題は、昨日、ララの身に何が起こったか」

シンジは本題に入った。

「僕は、昨日、外に出て行くララちゃんを見たんだ。だから、昨日、外に出て、そのまんまだと思うんだ」

「それ、正解かもしれないよ」

シンジは言った。

「ルル。その、持ってるペンダント、見せて」

「・・・うん・・・」

ルルは、自分の服のポケットの中から青い石のペンダントを出す。

「これは・・・僕の・・・僕達の・・・命の恩人の・・・くれた・・・物・・・らしい・・・」

「ふ～ん」

「これは・・・僕と・・・・ララで・・・一つずつ・・・持っていた・・・」

「！？」

ルルは、一番否定したかった言葉を言った。

「ララは・・・多分・・・ロベターか何かに・・・誘拐された・・・」

続く

十話「失踪と少年の涙」（後書き）

ルル「・・・・orz」
シンジ「自分で、言いたくなかったんだろ。仕方ない」
カズマ「ああ、嫌な事でも、しなくちゃいけないときがあるんだ！」

十一話「最強の怪物と正体」（前書き）

カズマ「Σ最強の怪物！？」
シンジ「一体何なんだよ・・・」

十一話「最強の怪物と正体」

全員、ルルの言葉に動揺していた。
みんな分かっていたのだ、だが、否定していた。
分かりたくなかった。言われたくなかった。
それも、ルルの口から。

「僕が・・・不甲斐なかったから・・・！僕が、僕がちゃんとしていれば、ララは、ララは！」

「自分を責めたって、何も無いよ。ルル君」

タクミはルルを慰める。
それでも、ルルは自分を責めていた。

「タクミぃ・・・でも、でも！」

「そうやって自分を責めてても、始まらないさ。今の話で大体分かった」

士が言う。
それは、全員にとって尤もな事だった。

「ララが誘拐されたって事は・・・ロベターのボスとかが、ルルの弱みを握って・・・っていう事かも・・・」

カズマが言う。

「カズマ・・・って・・・意外と、頭良い・・・？」

ルルは、ふとした疑問を言う。

「俺・・・一応会社の社長だから・・・・・orz」

カズマは少し落ち込む。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

一つの閉塞された部屋に、少女が居た。
手足を拘束された、ドレスを着ている少女。
少女が、口を開く。

「少女が、本来の力を解放した。いえ、明確には、解放させられた・・・。少年は、自分の本来の力に気づいてない・・・。早く、早く教えてあげないと。遅くなる前に、彼女は、もう利用されている・・・」

孤独な部屋に、声が響く。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ララは、ある場所に監禁されていた。

「・・・・・私は・・・つかまったんだ・・・」

「あ、目が覚めたみたいだよ、この子」

ある目の前にいる身軽そうな少女が言う。
ララを襲った人の一人だ。

「あなたは・・・！」

「僕の名前はセン。ねえ、君は、何なの？」

センと名乗った少女が言う。

「・・・・！」

ララは、早くルルの所に帰りたいと思う。

記憶をなくしているルルが心配で、心配だった。

「早く、私を、放してよ！」

ララは、通常では考えられない腕力で鎖を断つ。

「何！あれ」

センは驚く。

「うわあああ！！！！！」

ララは、怒りだけで、目の前の鉄の牢獄を破る。

「早く、早くルルに教えないと・・・ルルが、ルルが・・・。すべての世界が・・・！」

「ちょっと！ケン！話が違うじゃないか！」

「これは俺も想定外だ！」

ケンと呼ばれた青年は、そう言いながらもララを鎖に縛りつける。

「うううううううう、うあああああああああああああああああ！！！」

ララは完全に自分を抑え切れていない。

自分の力を、抑えられないのだ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「・・・！ロベターが・・・」

ルルは、そう言う。

「ロベターだって！？」

カズマは驚く。

「早く行きましょう！ルル、場所は？」

「東の方角・・・早く行こう！ララを・・・取り返す為にも・・・！」

「「「「「「ああ！」」」」」」

「うん！」

「ええ！」

全員で、その場所に向かった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「これは・・・・」

ルルは驚愕した。

目の前の惨状は、誰にも想定し得なかった。

「ロベターと・・・何か、分からないけど、禍々しい力を感じるわ・・・」

ルンは言う。

目の前には、ロベター、セン、ケン。そして・・・何か分からない、怪物のような者が居たのだ。

「ふふふ、君達、よく来たね。でも、今日が君達の終わりさ！」

センはそう言い放ち、ロベターを一斉に突撃させる。

「「変身！」」

まず、ユウスケ、士が変身して特攻していく。

「ユウスケ！士！」

カズマが叫ぶ。

「俺達が雑魚を抑えている、ルル達はソイツを！ソイツは絶対一人

じゃ倒せない！」

ユウスケが言う。

「うん・・・」

ルルはそう言って、変身し、それに立ち向かう。

「「「「変身！」」」」

『アアア！！！！！！！！！！！！！！！！！！！』

それは、悲鳴に近い叫び声を出していた。

悲しそうな、否定するような、そんな感じだった。

だが、それはルル達に攻撃をしかけてくる。

悲痛の叫びを上げながらも

『アアア！！！！』

「何だよ・・・アイツ・・・強すぎる・・・」

カズマは言う。

「ふふふ、さあ、つぶしあえ！ははは、何だか清清しいね！」

センは言った。
彼等には、まだこの状況が分かっていない。
相手の正体にも。
ルルは、薄々気づいているようだが・・・。

「・・・・！」

「ルル！どうしたんだ！」

シンジが叫ぶ。

「僕には・・・出来ない、何だか、怖い・・・。戦うのが・・・。戦いたくない・・・」

ルルは、変身を解き、戦う事を否定した。
ララを取り戻そうと思っているルルにとっては、戦うしかないと思っていた全員は、ルルのその態度に疑問を持つ。

「どうしたんだ！お前らしくないぞ！」

「ちょっと待って！」

そう言うシンジをとめたのは、タクミだった。

「どうした、タクミ」

「ルルの言葉が・・・少し、僕にも分かるかもしれない・・・」

「・・・！まさかとは、思うけどさ・・・」

カズマも、薄々気づいてきている。

「あの怪物から、ララの気配がする・・・」

「ははは！今更気づいたの？」

センが言った。

「そう、その根暗の言うとおり、その怪物はララっていう少女。全く、笑えるよねえ・・・・てか、怪物だったんだ。そのペンダントが、その力を封印してるみたいだけどね。そうだ、根暗、君のペンダントも取ってやろうか？」

「・・・！？」

センの言葉に、ルルは驚愕する。

ルルが驚愕している間に。センはルルの手前に来る。

「触るな！」

ルルは、一歩引こうとする。

だが、間合いを取られ、センはルルのペンダントに触ろうとする。

「危ない！」

懐かしい声が響いた。

「君は・・・」

ルルは、見た事も無いような少女に、懐かしさを感じる。

「ルル、後ろに引いて！」

「あ、うん・・・」

ルルは、少女・・・ラルに、言われたとおりに引く。

「ララを、返しなさい」

「・・・誰がっ！」

ラルの気迫に、センは、少し怖気付くも、一歩も引かない。

『アアア・・・・』

「うっ！」

一方、タクミ達も、ララだと気付くと、本気で戦えない事に苦戦する。

「とめる方法は無いのか！」

カズマは嘆く。

「・・・！そうだ、これ・・・！」

ルルは、カズマにペンダントを渡す。

「これは・・・」

「ララの・・・ペンダント・・・それをつければ、きっとララは元に戻る・・・！」

「分かった！」

カズマは、それを受け取ると、ララの所へ向かった。

「いい加減目を覚ませ！」

カズマは一応ララを殴り、倒れた所にペンダントをかける。
ララの体は人間に戻り、カズマを見る。

「あはは・・・」

「あはははは・・・っじゃねえ！」

カズマが怒鳴る。

「・・・・ふぇ？」

「あのな、ルルが心配してたんだぞ。ルルにとっては唯一の家族！お前がいなくなればルルは本当に自分が何者かも分からない！それを分かってるのか！？」

カズマの説教が響く。
カズマはなんやかんやで、ルルを思っているのだ。
記憶喪失で、ララにしか頼れなかったルルを、救ってやりたいと思

ったのだ。

「家族ってのは、大事なもんなんだ。士だって、妹さんの事、大事だろう？」

「あ、ああ。アイツの事が、心配だ！」

「俺も、妹が居るんだ。早くこの世界の危機ってのを救って、今すぐにマユの近くに行ってやりたい」

カズマ、士、ソウジが続けて言う。

「・・・・ルル」

ララはルルに言う。

「心配かけて、ごめんね」

ララは、泣きながら言った。
戦っている間、ララには意識があった。でも、体は言うことを聞かず、皆を襲う手は止まらなかった。
ララも、苦しかったのだ。
大事な仲間と、弟と、弟の友達を傷付けたくなかった。

「友情ごっこは終わりかい？」

「アンタの相手は私！」

センが言うも、ラルがさえぎる。

「ラル・・・」

ララは、ラルを見て言う。

「ククククク・・・アーッハッハ！僕の仲間は、もう一人居るんだ。それ、もう知ってるだろ？」

タクミのすぐ後ろに、ケンが居たのだ。

「ぐうっ！」

タクミは飛ばされ、ベルトが取れて変身が解けた。

「うっ。コイツ・・・強い・・・」

「タクミ！」

ルルは叫ぶ。

「ふっ、弱いな」

ケンは言って、タクミの近くに行こうとする。その時。

「タクミに手を出すな！」

ケンは突如現れた氷に行き場をはばまられる。

「何だ、これ！」

その視線の先には・・・。

虚ろな目のルルが居た。

「僕の・・・友達に・・・手を出すやつは・・・許さない・・・・！」

ルルは、怒っている。

その怒りを込めて、殴りつける。

「ぐあっ！」

「何これ・・・・。コイツは、力を解放してないはずなのに・・・・」

「俺にも・・・分からん！」

「・・・・・」

ルルの背後に、灰色のオーロラが現れる。

そこから出てきた人物に、全員驚愕する。

続く

十一話「最強の怪物と正体」（後書き）

ララ「ここで質問」
ルル「何？」
ララ「失人君は？」

全員「・・・・・」

ララ「じゃ～ね～」

失人「おい！」
ララ「だって、時間無いもん」

十二話「少年の怒りと友情の奇跡」（前書き）

ルル「・・・前回・・・ララが・・・」
カズマ「言うな！ルル！」
ユウスケ「ああ！」

ララ「余談だけど、作者がユウスケ君の中の人のカレンダー予約したらしい」
失人「正確には、親じゃないのか？」

十二話「少年の怒りと友情の奇跡」

「僕の友達を傷付けるやつは・・・許さない・・・・！」

ルルの背後に現れたオーロラの中から、アスム、ワタル、ショウイチ、そして海東が現れた。

「ここは・・・」

「・・・どこでしょう？」

「とりあえず、何だかやばそうなんだが・・・」

「ここのお宝は何かな？」

「おや、仲間かい？」

ケンは訊く。

「はっきり言うけど知らない。ただ、士や・・・ユウスケ達の・・・仲間だって事は・・・分かる・・・」

ルルはそう答える。

「分からないですけど、さっき聞こえたんです。貴方達を倒さないと、僕達の世界は消えると。それが本当なら、僕達も戦います、そうですよね？ワタル」

「はい、それに、ユウスケも戦っています。僕も、一緒に戦います

！」

「何だか知らんが、世界が何とかって言ってるからな。俺も戦わせてもらう」

「僕のお宝でもある士達が心配だからね、戦ってあげるよ」

「お前ら・・・」

四人の言葉に士は驚く。

「・・・それでも、お前は僕達・・・を・・・相手に・・・するか・・・？」

ルルの低い声は、さらに低く、冷たく聞こえた。

「フッ、どうやら、俺もここまでのようだな！ここで引かせてもらうぜ！ま、センは置いて行くがな」

「ちょっと待て！」

「仲間割れ・・・か・・・」

ルルは、おいていかれたセンの元へ近寄っていく。

その時、センは、何かを感じた。

「・・・」

センは、ルルに懐かしさを感じたのだ。

「・・・・アンタは・・・・」

そこで、センの意識は途切れた。

「気絶したか。まあ良い。コイツはここにおいて置く」

「うっ！」

「ラル！」

ラルが苦しみだした。

「これは・・・長くはもたないものだし・・・大丈夫・・・。しばらくは・・・連絡が取れないけど・・・二人なら・・・大丈夫よね・・・？」

そう言って、ラルの姿は消えた。

「ラル・・・」

ララの声が、響いただけだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「で、これが今までの経緯なの」

アスム、ワタル、ショウイチ、海東にララは今までの説明をしていた。

「なるほど、それで、僕達を呼んだんですか」

「まあ、な。少し予定とは違ったみたいだが」

「ルルがあんな力を持ってたなんてな。俺も予想外だよ」

カズマが言った。

全員予想外だったのだ。

ルルは、あの時はララを利用された怒りと、仲間を傷つけられた怒りで無我夢中になってやったという。

「まあでも、それで助かったんだから良いじゃん」

ララは言った。

一方で、タクミは考えていた。

（さっきのララちゃんの姿・・・。あれは一体・・・さっきのルル君の力も気になるし・・・）

「どうしたんだ？タクミ」

「あ、シンジさん」

考え込むタクミの隣に、シンジが座っていた。

「いや、ちょっと考え事を・・・」

「そうか、ま、僕も気になってるんだけどね」

「シンジさんもですか？」

「まあ、僕も報道員だからね～。結構色々レンさんと一緒に調べたりとかしてるの。謎は追求するのが仕事だからね～」

シンジは考えるような姿勢をとりながら言う。

「ま、本人がまだ言うつもりじゃないんなら、仕方ないけど」

真偽を知るには、ララに訊くか、ラルに訊くか、その二択しかない。いずれ、ルルは覚えてないのでララはルルに話さなければならなくなる。

それを待つしかないのだろうか？

「それにしても、さっきさ、ララから凄い力を感じたんだ」

「確かに・・・僕も、なんだか、信じたくないけど・・・」

タクミは、一呼吸置いてから言った。

「僅かに、オルフェノクの気配を感じました」

それは、タクミのオルフェノクとしての本能なのかどうかは定かではないが、タクミはそう感じたらしい。

「成る程ね、少なくとも、彼女たちは普通の人間じゃない。それで、いつか、僕達はそれを知るだろう。何だか、ルルの正体を知るのは・・・真実を知るのは、少し怖いけど・・・」

そう言って、シンジはルルとカズマに呼ばれて、別の方へ行った。

タクミは、シンジの言葉の最後の、真実を知るのは少し怖い。それ

の意味を理解していた。
人間じゃない自分の正体を暴く位に、怖い。
（ルル君がもし、オルフェノクだったら・・・）
そんな事さえも考えてしまった。
そんな事を考えざるを得ない状況だった。
「何してるの？タクミ君」
「ララちゃん・・・」
そんな考え込むタクミを心配したのはララ。
「ねえ、ちょっと話、良いかな？」
「え？」
そう言って、ララはタクミを無理矢理ベランダへ連れて行った。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
「タクミ君には、言っておいた方が良いかなって、まだ、全員に言う覚悟は無いから、少しだけ、私達に近いタクミ君には、話して置くね。これは、みんなには内密に、お願い。特に、まだ来たばかりのアスム君やワタル君、ショウイチさんに海東には、まだ言えないから」
そう言って、ララは、タクミにすべてを話した。

タクミには、驚愕と、自分以上に苦しい人生を送って来たルルとララの事が、とても心配になった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「あ、タクミ・・・どうしたんだ？」

「あ・・・うん・・・何でも無いよ・・・」

タクミは、ルルを見ているのがキツかった。
タクミは、逃げるように部屋に行っていた。

「・・・タクミ・・」

「何があったんだ？」

「なるほどな」

心配するルルと、分かってないカズマと、理解したシンジであった。

続く

十二話「少年の怒りと友情の奇跡」（後書き）

士「やった！俺はやったぞ！」
ユウスケ「どうしたんだ士？そんな分かりやすく喜んで」
士「ふっふっふ、実は、来年の映画に俺が出るみたいなんだ！」
カズマ「へえ～」
シンジ「僕でないんならどうでも良い」
アスム「師匠は？」
ワタル「ユウスケは？」
ソウジ「良かったな」
ショウイチ「そうか」
タクミ「・・・・どうせ僕なんて・・・・！」
ララ「とりあえず、士君皆に謝って」←無意識に殺気
ルル「特に・・・タクミに・・・」←カッターナイフ取り出しながら殺気がもんもんとする
士「すみませんでした」←土下座

夏海「でも、私とかユウスケって、出るんでしょうか？」
ユウスケ「う～ん、俺達は出る可能性大じゃないのか？」
ララ「中の人の都合にもよりますけどね」

十三話「不安とカズマのドジについて」（前書き）

ルル「前回は、タクミが僕達の過去を知ったようです」

ララ「まあ、ただ、私達が何なのか～っていうのを教えたくらいだけどね」

ルル「え、なら、タクミが前回知った事より・・・」

ララ「結構重いんじゃない？」

ルル「じゃない？って・・・」

十三話「不安とカズマのドジについて」

タクミは、不安になっていた。

（ルルは、自分の記憶を取り戻そうとするのだろうか・・・なら、あんな事を、彼は知らなくてはならない。あんな、苦しい過去を。まさか、ルルが、あんな過去を背負っていたなんて・・・）

あまり深い所までは聞かなかったものの、それでもララとルルの過去は重い物だった。

「なあ、どうしたんだ？タクミ。さっきルルの顔を見るなり悲しそうな顔してさっさと部屋に行ってさ～」

空気を読まないカズマが、いつの間にかタクミの下宿している部屋に入って来ていた。

「カズマさん・・・なんでもないです」

「ルルの過去だろ」

「シンジさんから僕が何について不安になってるって聞いたんですか？」

タクミはカズマに訊いた、だが、カズマは首を横に振って

「いや、俺の推測」

「意外に頭良いんですね」

「いや、だから俺は元の世界では社長って言ってるだろ・・・」

カズマはルルにも言われた言葉をタクミに言われて少し落ち込む。

「俺さ、なんか、強い相手とか、出てきてたじゃん？それに、対抗できるのかな～って、今、少し不安になってるんだ」

カズマは、唐突に話を始める。

「はい？」

「で、ブレイドを最強のフォームにする為の物があるんだ。それを見つけて、ブレイドを最強のフォームにする、そう思ったんだけどさ・・・」

「思ったけど？」

「それ、使い続けると体力の消耗激しいし、人間じゃなくなるんだよな～」

思いふけるように言うカズマに、タクミは驚く。

「ええっ！？」

「そう、ブレイドの資料に書いてあったんだ。タクミはさ、人間じゃなくなる事、望んでた？まあ、望んでる筈ないか・・・」

「そうに決まってますよ！」

タクミは怒鳴る。

「こんな風にならなければ、あんな風に言われる事もなかったんです！この世界でも、危険扱いされたんですから！」

カズマは驚いたと同時、やってしまったなと思った。

（しまった、地雷踏んだか・・・）

（カズマ！何してるんだ！）

少し離れた所で、シンジは頭を抱える。

「なら、尚更。俺も、お前の仲間になるかもな」

「え、もしかして・・・」

「もし、それを見つけたら、俺は覚悟を持って使う。士あたりに自分を捨てるな！みたいな感じで怒られそうだけど。年下に怒られるのもな～」

「え、カズマさん、士さん達より年上なんですか？」

「そうだけど・・・」

「ええっ！？」

タクミの意外そうな反応にカズマはまた落ち込む。

「俺そこまで馬鹿な子に見えるのか！」

「だってあんなドジかましてたら誰だって思いますよ！チーフをチーズと言い間違えたり！料理こぼしたり！しかもそれに加えてドジの連鎖かましてましたよね！」

「何でそれ知ってるの！」

「士さんから聞いたんです！」

「士あんにゃろうとっちめる！」

「大体ですね、カズマさんはさっきも何もないところで転んで事故とはいえ士さんのズボン降ろしてたんですよ！公衆の場で半裸（しかも下半身）を晒す事になった士さんの身にもなってくださいよ！」

「それは士がそこに居たのが悪いんだろ！てか、タクミにそこまで言われる筋合いないだろう！」

「だ～か～ら～っ！そういう所が子供っぽいんですよ！少しは見た目に反して大人っぽいララちゃん達を見習ってください！」

「分かった分かった！もう、俺が子供っぽく見られてるのは分かったからさ！てか、高校生にこんな説教される俺って・・・」

「はい、もう口論終わり。てか、さっきから見てたけど・・・カズマが悪い」

呆れたシンジが二人を止めに来た。というより、最初から見ていたが。

「どこまで俺を馬鹿にしてるんだ！」

「はあ・・・」

「まあ、僕も言い過ぎましたよ。すみません。少し、過去の事言われて、ついかっとなっちゃいました」

タクミが本心で言っている言葉にカズマは少々落ち込んでいた。

（タクミって、結構純粋系かな～）

と、シンジはその光景を見ていた。

「カズマ・・・シンジ・・・タクミ・・・」

いつの間にか、部屋にルルが入っていた。

「あ、ルル。どうしたんだ？」

「カズマ、士が・・・怒っている・・・ちょっと・・・今・・・ララが・・・制裁・・・くらわしてる・・・」

ルルの言葉に、三人は言葉をこぼす。

「それ、報告か？」

カズマは自分への嫌味かと思っている。

「てか、ララが制裁くらわしてるって・・・」

シンジはララの強さにララが仮面ライダーになれば？と思い。

「あういう子って、怒らせると怖いんですかね～」

タクミの言葉ふと思って言った言葉に、カズマとシンジは

（（タクミの様な奴も、怒らせると怖いんだろうな～））

と思っていた。

「ちなみに、僕が・・・知ってる中で、一番・・・怒らせると怖い人は・・・ルンと、ロン」

「何でだ？」

ルルの言葉に、シンジはたずねる。

「二人の喧嘩は・・・ランチャーのぶつかり合い・・・だから・・・」

二人が喧嘩しそうになったら、俺（僕）達でとめようか・・・。

三人のあたらな決意が生まれた瞬間だった。

続く

十三話「不安とカズマのドジについて」（後書き）

今回は戦闘なかったですね。
てか、カズマ、タクミ、シンジ、ルルの出番の安定性ｗ
何故好きなキャラに偏るｗ
まあ、次回は一方でのアスム、ワタル、ショウイチ、海東と士達の話です。
今回タクミとかが触れていた話の一部始終も見れたりｗｗｗｗ

十四話「話と士の不憫」（前書き）

士「サブタイトルって、もしや・・・」
ユウスケ「ああ、前回タクミ君が話してた、カズマのドジか・・・」

十四話「話と士の不憫」

「あ、まだ、皆さんに話したい事があります」

タクミが真相を知る数十分前。
ショウイチ達に詳しい話をしていた。
ララは、席に着くと、話を始めた。
さっきは時間が無くて話せなかった事も、話していた。

「成る程・・・で、君達はすべての世界を救う為に、此処に僕達を集めたんだね」

海東は納得している。

「という事は・・・この世界にも、様々な怪物が出ているのか？」

ショウイチは訊く。

「う～ん、まだ、活発には動いてないけど・・・。微かに、色々な怪物の気配がする・・・」

そう言って、ララは山積みにしてあるカードを捲った。

「やっぱり・・・」

ララの手には、グロンギの描かれたカードがあった。
続いてララがカードを捲っても、アンノウン、ミラーモンスター、オルフェノクなど・・・様々な世界の怪物が描かれたカードが次々と出てきた。

「こんなにも・・・」

士、夏海、ユウスケ、海東は困惑していた。
何故、其処までこの世界に怪物が集まるのか。

「ま、あまり緊迫してても始まらないし、ご飯、食べましょうか」

「あ、ああ・・・」

そう言って、ララはキッチンへと向かった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

事件は、ララが料理を作っている間に起こった。

「士～、士～！」

カズマが、本に夢中になっている士を呼んだ。

「そんなに叫ばなくても聞こえてる。どうしたんだ？」

「あのさ・・・さっきの・・・」

「士、待ちたまえ、其処の青いのと話すより、僕と話すのが先だろう？」

カズマが先程のララの力について話そうとした所、海東が割り込んできた。

「海東、黙れ」

士は海東を避けるも、海東は士にまとわり付いてくる。

「士〜！」

カズマは完全にのけものにされている。
カズマは、士の服の裾を掴もうとした時・・・間違ってズボンの方を掴んでしまい、そしてカズマは海東を追いかけようとする士に引き摺られ、こけて、士のズボンを降ろしてしまった。

「イテッ！」

「士ああああああああああああああああああああああああああああ！！！！」

「カズマあああああああああああああああああ！！！海東おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

士の叫び声が辺りに響き渡った。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

士のズボンドジっ子引き摺り下ろし事件があって、タクミがルルを見るなり泣きそうな顔して逃げる事件の後、心配したカズマは、タクミの部屋に行った。
シンジも、かなり後ろの方から覗いている。

「タクミ・・・どうしたんだろう・・・」

何も知らないルルは、考える。
不安になってくる。

「大丈夫なんじゃないですか？」

言ったのは、意外にもアスムだった。

「何で・・・そう・・・言える・・・？」

「何だか、そんな感じするんですよ、それに、カズマさんとシンジさんが居るからきっと大丈夫ですよ」

アスムは自身有り気に言った。
あまり、話してないんだろうな・・・。と、ルルは思いながら、ぼうっとしていた。

「あ、ルル。アスム君。タクミ君とカズマ君は？大丈夫なの？」

「ララ・・・多分・・・大丈夫・・・」

ララが来て、ルルは答える。

「それにしても、ララさんって、何歳ですか？見た目に反して、少し大人っぽい感じですよね。かなり年上の筈のカズマさんとかも君付けですし」

「うん、だって、２３歳だもん」

ララの超衝撃発言にアスムは固まる。

丁度近くに居た、ショウイチ、ソウジ、士、ワタル、夏海、ユウスケもだ。

「「「「え゛!?」」」」

「あれ?言ってなかった?私、バリバリ社会人の23歳だけど・・・」

「「「「「えええええええええええええええええええええええ!??????!!!!」」」」」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

カズマ、タクミ、シンジが戻って来た頃には、ララとルルの周りは騒然としていた。

「どうしたんだ?皆してララとルル囲んでさ」

カズマは気になって言った。

「カズマ・・・今・・・士達は・・・混乱してる・・・」

「あれぇ?私の年齢言っただけなんだけどなあ・・・其処まで驚く?」

いたって平常心のルルと、あれ?と首をかしげているララ。

「バリバリ見た目が中学生に言われたくねえ!!!」

その二人にユウスケは突っ込む。

「見た目が何とかって・・・もしかして、ララとルルの年齢？」

シンジは尋ねた。

「そう！何だか、私が２３歳だよ～って言ったら。み～んな放心状態！何で～」

「ララちゃんって僕より年上だったんですか！？」

「俺達と年齢其処まで変わらなかったのか・・・」

「俺より年上・・・ｏｒｚ」

上から順にララ、タクミ、カズマ、士。

特に士はララの方が年上だった事に凄い驚いている。

というより放心状態。

「ララって・・・２３歳だったんだ・・・俺より３歳年上・・・」

と、丁度外で話を聞いていた。というか、玄関に来ていた失人は、少し落ち込んでいたとか。

続く

十四話「話と士の不憫」（後書き）

カズマ「前回からネタ回が続いてるな～」
ユウスケ「だな」
タクミ「ララちゃん達って・・・僕より年上だったんですか・・・」
士「通りで、何だか大人っぽかったんだな～」
ソウジ「普段は、天然で純粋な少女を演じているのだろうか？」
ショウイチ「いや・・・あれは普通に根っからの天然だろう・・・」
ルル「ララは・・・スーパー天然だから・・・」

十五話「ワームと怪物の発生」（前書き）

ララ「今回は、遂に様々な怪物がこのワールド・ブリッジを襲う！」
ルル「さあ、僕達の運命は！」
カズマ「そして電王はやはり出ん王だった！」

ルン「Σ最後の要らない」

十五話「ワームと怪物の発生」

鈴海(すずみ)姉弟年齢暴露事件のすぐ後、失人(しつと)がマリンチェリアを訪れた。

「あ、失人君」

「ララ・・・さん？」

開口一番の失人の言葉からして、先程の会話を聞いていたのだろう。

「どうしたの？失人君」

「失人・・・毒キノコでも食べたか・・・？」

（さっきの話、聞いてたんだろうな～）

失人の言葉に疑問を持つ原因のララとルル。そして、失人に少し同情するカズマ。

「いや、何でもない。ララ、ワームが現れた」

「そんな・・・！ワームがこの世界に来るのは最低でも明日の筈！どうして・・・」

失人の言葉に、ララは驚愕する。

それぞれの世界の怪人が来るのは、この世界に張ってあるバリアーに防がれて、そう簡単には侵入は出来ない筈だ。

「うっ！」

「ララ！」

ララは、頭が痛いのか、頭を抑えて蹲る。

「大丈夫・・・。ちょっと、部屋で休むから・・・。退室するね・・・」

「僕が送ろうか？」

「大丈夫・・・」

そう言って、ララはその場を後にした。

「ララ、大丈夫なのか・・・」

ルルは、ララが心配なのか、落ち着かない様子だった。
カズマは、心配なら行ってやれ、と言おうとしたが、ルルに言われても、甘えなかったのは、何か意味があると思ってあえて言わなかった。

「とりあえず、ワームが来たんだよな？」

ソウジは、失人に確認する。

「・・・くっ！」

自分の世界の怪物だからなのか、ソウジは少し悔しそうだった。
そして、黙って、ソウジはその場を離れようとした。そのときだった。

「黙ってお前一人で行っても意味が無いだろう」
少年の声だった。カズマと失人は、その少年に会った事がある。
「お前は・・・」
「アクア！？」
「よ、ブレイドのにーさんに、新人のにーさん」
アクアはからかうように言った。
「俺には剣立カズマって名前があるんだ」
「俺だって、歌野失人っていう立派な名前があるんだよ」
二人は少しいイラッと来たのか、ムキになって言う。
ソウジは、図星を突かれたのか、少し悔しそうに顔を下に向けている。
ルルは、アクアの方を見つめている。
「それにしても、記憶をなくしてるとララからは聞いていたが、俺の事も忘れてんのか」
顔立ちは中性的よりも女性なのだが、性格や口調、声は完全に男だった。
「お前は、誰だ？」

「だから、言っただろ、俺の名前はアクア。ルル、本当に忘れてるのか・・・いや、忘れてたら、こんな風にはなってないか」

アクアは、ルルを見つめて言う。

「で、何で、お前は此処に来てるんだ？」

シンジは、話が進まないのに少し苛立って、アクアに詳しい事を聞く。

「ああ、ララから言われたんだ。自分の代わりに話を聞いて来いってさ。で、ワームとやら現れたんだろう？なら、全員で行くしかないだろう、どうやら、その場所にはロベター、ミラーモンスターも居るみたいだぜ」

アクアの言葉に、ルルは反応する。

「ロベター・・・！」

「えっとそこの・・・龍騎のにーさん、ミラーモンスターってのは、お前の世界の怪物だろう？」

「あ、あ～」

アクアに話を振られたシンジは、ミラーモンスターというのがあまり分かってないのか、考える。

「僕が知ってる限りだと、各ライダーの契約モンスターしか知らないんだ・・・。僕の世界だと、ライダー同士で戦って、裁判の判決を決めるライダー裁判って法律だからさ。僕も、偶然選ばれたって

いうか・・・なんていうか・・・」

シンジの言っている事は尤もだった。

そうだとすると、シンジは、其処まで戦いに慣れてないという事となる。

「シンジ・・・。アクア、その場所に案内してくれ・・・」

「分かった。この中で、一緒に行く奴は？」

アクアは、その場に居る全員に訊く。

「僕の世界の怪物も居るなら、僕も行くよ。まあ、それが居なくとも、ルルが行くなら」

シンジは、行く気満々だ。

「俺も！シンジやルルだけ行かせないからな！」

カズマは、シンジとルルガ行くならと、行く気になっている。

「俺も同行しよう。ワームが居ると言うなら、黙っていられない」

ソウジも、ワームを倒す為に、と行くと言った。

「じゃあ、このメンバーで良いな？」

「あ、俺も・・・！」

アクアが、行こうとした時、失人がとめた。

「何だ。お前は、戦えないだろう」
「でも、俺も行く。黙ってられないからな」
「後悔しても知らんぞ」
そう言って、アクアは失人の同行を許した。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
「此処か・・・」
アクアは、その場について、こう言った。
其処には、ワームが居た。
「擬態してないようで、良かったな」
ソウジは言った、
そして、ソウジ、シンジ、ルル、カズマは変身した。
「「「「変身！」」」」
「うっ・・・もうすぐか・・・」
アクアは、何かが来るように言った。
「何だ？」
「ララがもうそろそろ来るから、お前らは此処で戦っていてくれ」

そう言って、アクアは走り去っていった。

「なんだったんだ・・・？」

失人は、皆が戦っている横で、アクアが走り去っていくのを見ていた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「くそっ！鏡から出てきて攻撃するって・・・ずるいぞ！」

ミラーモンスターと戦っていたカズマは、苦戦していた。

「だから！ミラーモンスターは僕に任せて、カズマはソウジさんかルル手伝えって！特にルルは危ない！」

「分かった！」

シンジに言われたカズマは、ルルの居る方へ行った。

「さて・・・僕が相手だ！」

「ルルー！」

「カズマ！・・・うわあっ！」

走ってルルの方へ向かってくるカズマに気付いたルルは、ロベターに飛ばされる。

「くそっ・・・。カズマ、シンジはどうした？」

「シンジは一人で出来るとさ・・・まあ、少し心配だがな。だが、お前のほうがやっぱ心配だ！」

「カズマ・・・ああ、行くぞ・・！」

ルルとカズマは、ロベター達に向かって行った。

「クロックアップ」

ソウジは、その瞬間、慣れた世界に入る。
クロックアップの世界だ。
ソウジはこのクロックアップの中に閉じ込められていた。
だが、今は一時的ではあるが、ある人物にベルトを直して貰った為、普通に生活が出来る。

「まだ脱皮してないか・・・」

クロックアップから出たソウジは、ワームが倒れた事を確認すると、一番心配なルルの所へ向かった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「皆が戦ってるのに・・・俺だけ戦えないのかよ・・・！」

失人は、悔やんでいた。
戦えない自分を・・・。

「せめて・・・せめて、デクレスが直っていれば・・・」

彼は、そう言う。

失人は、かつて仮面ライダーデクレスの適合者だった。

だが、ロベターの襲撃により、壊れてしまったキーの一つだ。

失人は、ポケットの中から、壊れた腕輪のような物と、鍵を出した。

デクレスのキーリングだ。

「・・・・」

「あ、失人く～ん！」

ララが走ってくる。

「ララ・・・」

「みんな・・・戦ってるの？」

「ああ・・・」

失人は、悔しそうに戦っている彼等を見る。

「・・・」

「せめて・・・俺が、変身できれば・・・」

「失人君、自分を責めても、駄目だよ」

「でも・・・形は保ってるのに、直せないってのが・・・辛くてな・・・」

失人は、言葉を続ける。

「此処に、あともう少しで、俺はあいつらの助けに入ってやる事が出来る。なのに、あともう少しなのに・・・俺は、こうやって見る事しか出来ない。それが嫌で・・・」

失人の瞳からは涙が流れていた。
他の世界から呼んだ人達に助けて貰うほど、自分達は弱かったのか、そんな気持ちになっているのだ。

「うわあああああああっ！」

「カズマ！」

「シンジ！そっちは危ない！」

「・・・・」

現状を見て。ララは苦しい顔をする。

「ごめん、ちょっと別の場所に行ってくる」

「ああ・・・」

ララは、失人にそう言って、その場を立ち去る。

「お願いだから・・・俺にも、力をくれよ・・・。あいつらを助けてやれるほどの力を！」

失人がそう叫ぶ。

その声は、虚空にしか響かないから、その声は、何も成さなかった。

その時だった。

「・・・・・」

バイクとともに、一人の白を基本とした白黒のライダーが現れた。

「何だ・・・お前は・・・」

「・・・・・」

そのライダーは何も答えず、戦いの場へ行った。

「何なんだよ・・・」

失人は、呆然とするしかなかった

続く

十五話「ワームと怪物の発生」（後書き）

タクミ「今回の次回予告は僕達の番です」
シンジ「次回は、突如現れた謎の仮面ライダーピアニィ！」
カズマ「その行動はいかに！？」

ルル「・・・アクア・・・何処かで・・見た事あるような・・・」

十六話「ピアニィと青年の決意」（前書き）

ララ「失人君って、カブトの加賀美さんみたいな扱いなのかな？」
ルル「ああ～、最初変身できなくて後から変身できるようになるっていう感じか？」
ララ「そうそう」

カズマ「最初のルルの設定どこ行った」
シンジ「それ僕も思った」

十六話「ピアニィと青年の決意」

「仮面ライダー・・・ピアニィ！？」

ルルは、此方に向かって来た白を基本とした白黒のライダーが来ている事に気付いた。
それは、前にルル達を助けた仮面ライダー、ピアニィだった。

「・・・・・」

ピアニィは、黙ってロベターを片付ける。
ルル達も、何もしないわけにはいかないので、ロベターと戦っていた。

「それにしてもっ！あのっ、ピアニィってっ・・・・奴はさっ！味方ってっ思ってっ良いんだよなっ？」

シンジは、ロベターと格闘しながら、ルルに訊く。

「・・・・うん・・・。多分・・・」

ルルも、何が何だか分からない為、ちゃんと断言できない。
カズマとソウジは、戦う事に夢中となっている。
この二人は、戦いの経験が多い為、戦いには真剣にしているのだろう。
それほど、相手は強い。

「・・・・くそっ！」

カズマは嘆いた。

（何だよあいつら！只のロボットかと思ったけど・・・やっぱ強い！お前に戦った奴よりも・・・）

カズマはそう思いながらも戦う、戦うしかないのだ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「俺は、見てる事しか出来ないのか・・・」

失人は、そう思う。

「小原さん・・・。俺に、力ってあるんですかね・・・・」

自分の上司は、自分の力を認めてくれて、デクレスを託してくれた。
その期待を裏切って、自分は壊してしまった。
自分で受け持った使命を、果たす事が出来なくなってしまったのだ。

「よ、失人」

余計空しくなってきていた失人の傍に、小原が居た。

「小原さん・・・何で此処に居るんですか？」

「ちょっと、お前に来てもらいたい所がある」

「今、忙しいんですよ・・・」

失人は、今の状況をみてすぐに分かる嘘をついた。

「戦いを見てても、空しいだけだろう？それに、お前はもう一度、デクレスになれるかもしれないんだぞ」

そう言って、小原は、失人をある場所に連れて行った。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「此処は・・・どこなんですか？」

小原に連れて来られた場所は、廃工場のようだった。

「此処は、実験施設だったらしい。俺も最近までこれの存在を知らなかった。いや、もう二度と犯してはいけない禁忌を、この施設で犯してしまったのだろう」

小原はつぶやく様に言う。

「これは、ワールド・ガーディアンに直結していた場所なんですか？」

「此処は、初代キーライダーシステムを作った場所だ」

小原は、失人に語りかけるように言う。

「初代・・・キーライダー・・・システム・・・」

「ああ、ピアニィやフォルティの様な物だ。此処で、それの装着者の実験もしてたらしい。実は、これの名簿を見ていたら、ある人物の名前が見えてね」

小原は、バッグに入れていた資料を出す。
そして、資料の中にある、装着者候補生の名簿の中に、鈴海ララと、鈴海ルルという名前があったのだ。

「ララと・・・ルル・・・」

「ああ、俺も、これは流石に知らなかった。二人は、元々仮面ライダーになるように育成されていたのだ」

「でも、この施設は、禁忌を犯したって・・・」

「残念な事に、詳しい事は分かってないのだ・・・」

小原は、顔を下に向ける。
小原にも、何も分かってないのだ。
失人達は、奥の方へ入っていく事にした。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「あれ？ルル、失人は・・・」

カズマは、失人が居なくなった事に気付いて、辺りを見回す。

「分からない、とりあえず、今は戦闘に集中・・・しないと・・・」

「お前に言われなくても分かってる！」

カズマは、ロベターを振り払って、応戦する。
ルルも、失人の行き先は気になるが、今は戦わなければいけない。

もどかしく思いながら、ルルは戦っていた。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
「これは・・・」
失人が、その建物の奥で見た物は、台の様な物と、何本ものコードがあって、コードは機械の様な物に繋がっていた。
「失人、これは危険だ。あまり近づかない方が・・・失人！」
失人は、小原がとめるのも聞かず、その機械へ近付いた。
そして、失人はその機械にデクレスのキーリングを触れさせた。
「失人・・・！お前・・・」
その瞬間、キーリングは光り、少し異形な形へと変貌していた。
「これが・・・デクレスの新しい力・・・」
失人は、そう呟いていた。
小原は、その状態の失人を見て、驚愕していた。
「失人・・・何してるんだ！おい！」
そう小原が呼びかけた時、失人は倒れた。
「失人、何があったんだ・・・」
小原は、失人を抱えて、その場所を離れた。

（一体何が起こってたんだ・・・。この施設で！）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「これでっ最後だっ！」

「うおりゃあああああああああああ！！！！」

「ライダーキック！」

「・・・・・行く！」

カズマとシンジとソウジとルルが技を決める。

ロベターは倒れたのだ。

そして、ピアニィが立っていた。

ルルは、ピアニィに話しかけた。

「お前は・・・何者なんだ・・・。姿を、現してくれ！僕は・・・お前を・・・知っているのか・・・？」

ピアニィは、何か悲しそうな雰囲気を纏いながら、その場をバイクで離れた。

「おい！待て！」

シンジが呼び止めるも、ピアニィはとまらなかった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「は～、一体何なんだよ！あのライダーは」
カズマは煮え切らないようで、もう降参とでも言うように手を広げていた。
「僕も分からないよ、とりあえず、ルルの知り合いなのかもしれないって事は、分かったけどな」
「とりあえず、予定よりもワーム達の出現が早いって話だったな」
ソウジは言う。
ソウジの言葉に反応するようにルルは顔を上げる。
「ごめんなさい・・・僕が覚えてないばかりに・・・」
「良いんだよ。ルル。仕方ないんだからさ」
カズマはルルを慰めるように言う。
その時、マリンチェリアの扉が開いた。
「小原さん・・・！」
「ルル・・・すまない、失人の様子を見てやってくれ」
「ああ・・・」
小原が、失人を背負ってきたのだ。
シンジは、ルルだけじゃ成人男性は持ちきれないだろうと、ルルの

手伝いをする。

「僕も手伝うよ」

「有難う・・・シンジ・・・」

そして、失人は部屋へと運ばれた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「それにしても、何で失人は、倒れてたんですか？」

カズマは小原に訊く。

「俺にもわからない・・。ただ、機械にデクレスを触れさせて、そして、突然倒れたんだ」

「機械・・・」

ルルは、失人の腕にはめてあるデクレスのキーリングを見て、ルルは、それに触れる。

その時

「・・・！」

「どうしたんだ？ルル」

「なんでもない・・・」

（何だ、今のは・・・）

ルルは、その力に覚えがある。
とても、忘れたくない力だった。
それには、何かがある。ルルは、それにもう触れたくなかった。

（失人は・・・この力を使っちゃ駄目だ・・・）

続く

十七話「ルルと失人の思い」（前書き）

カズマ「前回は、失人が小原さんと一緒にある研究所に行った」
シンジ「その時、失人は機械に触って、倒れてしまった」
ルル「一方・・・僕達は・・・ピアニィと共に・・・ロベターを倒していた・・・」
ルン「だけど、ロベターを倒したら、ピアニィは何処かへ行っちゃったの。何も話さずに」
ロン「そして、小原が倒れた失人を背負ってマリンチェリアに来たときの話だ」

十七話「ルルと失人の思い」

ルルは、怯える様な目で、失人の付けているキーリングを見る。まるで、これを使ってはいけないと言う様に。

「ルル・・・これは、危ない物なのか？」

今のルルの状態を察したカズマは、ルルを宥める様に言う。

ルルは、カズマの言葉に、頷いてから、震えた声で言う。

「これ・・は・・・使ったら・・・駄目・・・」

「・・・・・」

ルルの震えた言葉に、小原は悩む。失人は、見ているだけでなく、自分も戦いたいと言っていたのを知っているからである。

ルルがこれを使ってはいけないと言うのに、小原はなんとなく納得している。だが、失人が大人しくその言葉を聞くだろうか？いや、聞かないだろう。失人は、それほどルル達の力になりたいだろう。

小原は、悩みに悩んで、ルルに、語りかける様に言った。

「ルル・・・これは、失人の選んだ力だ。ルルがどうこう言って、アイツが聞く筈も無い。だから、ルル、お前も、失人の選んだ力に、何も言わない様にしろ」

「・・・・だけど・・・」

小原の言葉に、ルルは、反論しようとする。だが・・・

「ルル・・・俺なら、大丈夫だ。どんな力でも、俺は受け入れるさ・・・」

いつの間に起きていたのか、失人が、ルルを止めて言う。
その顔は、必死で、真剣だった。

「失人・・・」

「お前が言ってる事は本当なのかもしれない、危ない物だって。でもさ、俺も、戦いたいんだ。ルル達の役に立ちたいんだよ。この力でな」

失人は、そう言いながらキーリングを見る。
ルルは、まだ反論をしようとしていたが、失人の決意を知ったカズマとシンジに止められる。

「でも・・・それでも・・・！」

「ルル、失人が大丈夫って言ってるんだからさ」

「そうそう、此処は僕達の出番じゃない」

カズマとシンジに止められると、流石にルルは引いた。
でも、まだ何か言いたそうだった。
ソウジは、「そういえば」と、失人に尋ねる。

「あの、アクアという少年はどうしたんだ？」

ソウジに尋ねられた失人は、「あ～」と言いながら、なんと言おうか悩む。

正直言って、気絶するあたりの記憶はあまり無いのだ。
丁度その時だった。
「俺を呼んだか？」
「アクア！」
アクアが、当然の様に部屋の扉の所に居た。
その姿を確認したルルは、アクアに尋ねる。
「アクア・・・。今まで何処に・・・」
「ララの面倒見てたんだ。失人達をあそこに送ってからな」
アクアはそう言う。そして、アクアは先程の話を聞いていたのか、
失人に尋ねる。
その顔は、悲しそうな、憂いを帯びた表情だった。何故、アクアが
その様な表情をしているかは、誰にも分からない。
「失人、本当にその力を使うのか？」
失人は、決意を固めた様に、アクアに向き合って言った。
「ああ、どんなに危険な力でも、俺はこの力から逃げない」
「何で、そんなに自信がもてるんだ？」
アクアは、誰もが思ったであろう疑問を口にする。
「何でだろうな・・・俺にも、分からないんだ。でもさ、勇気とか、

自信とか、そんな物が沸いて来るんだ」
失人は、少し不安な表情になりながらも、前を向いて、アクアに、みんなに言う。
ルルは、その失人の自信に溢れた表情を見て、納得した。
「分かった。だから、失人が力に呑まれそうになったり、暴走しそうになったら、僕達が止める」
ルルのその表情も、真剣だった。ルルにとっても、失人の存在は大切なのだ。
それを見届けたアクアは、誰にも聞かれない様に、呟いた。
「だとさ・・・ララ・・・」
そして、アクアはその場を離れた。誰も気付かなかったが、唯一、気付いた人物が一人。
「・・・・」
ソウジは、アクアが部屋から出て行く様子を見ていた。
決して、ソウジがアクアを危険視しているわけではない。彼は、アクアが何者なのか、それが気になっていただけだった。
「ルル！」
大急ぎでルンとロンが部屋に入ってきた。何か起こった様だ。
「どうした・・・？」

ルルは、冷静に二人の話を聞く事にした。二人に流されて慌てても意味が無いからである。
ルンは、一度落ち着いて、話し始めた。
「ロベターと・・・魔化網が、マリンチェリアに向かってるって・・・！」
ルンの言葉を聞いたルル達は、全員でその場に向かった。
「魔化網・・・ですか・・・」
アスムは、自分の世界の怪物までも現れた事に、少々慌てていた。
自分が何とかしなければ・・・。
そう思いながらも、アスムも皆と共に現場へ向かっていた。
＊＊＊

と思った、だが、その手を止めなかった。一度自分で決めた物なのだから、責任を持って、それの行動に移る。
鍵の先についている、針。それを、自分の腕に刺す。

「うぐぐ・・・うがあ・・・・！」

「失人！」

「俺は・・・大丈夫だから・・・お前達も変身しろ・・・」

針から流れ込む力に、失人は顔を歪め、ルルは心配する。だが、失人は強がって、大丈夫と言った。
ルルに、心配かけさせたくないから、その思いは、ルルにも伝わり、ルル達も変身した。

「「「変身！」」」

「うう・・・変身・・・！」

そして、全員変身した。
失人が居た場所には、黒と紫の仮面ライダー・・・仮面ライダーデクレスだった。

続く

十七話「ルルと失人の思い」（後書き）

ララ「て事で・・・失人君変身しました！」
ルル「何気にララが出てない件について・・・」
アクア『まあ・・・仕方ないだろ・・・都合があるんだからさ・・・』

剣崎「次回は・・・」
城戸「失人君がデクレスに変身したな」
乾「そして、暴走系の仮面ライダーだな・・・」
剣崎「う～ん、所謂、レンゲルみたいな感じか？」
城戸「うん、なんか当たってる気がするな」
剣崎「で、戦いに移るんだが・・・」
城戸「何か起こるのか！？」
天道「いえないが、何かあるらしいな」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5213y/

仮面ライダーディケイドとある世界

2011年12月20日18時54分発行